

# アジアと女性解放

## Asian Women's Liberation

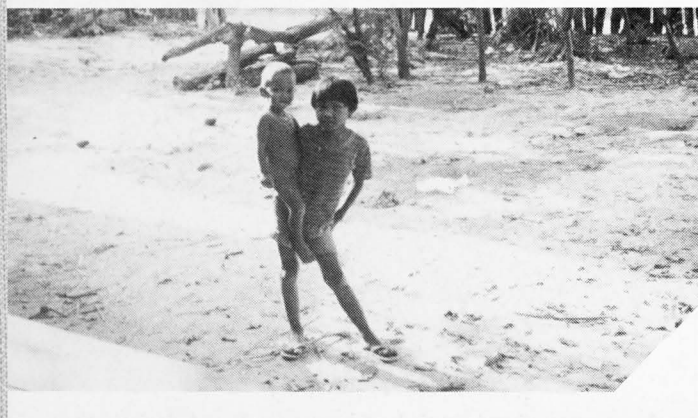
アジアの女たちの会

連絡先：  
東京都渋谷区桜ヶ丘14-10 渋谷コープ211号 400円



### 特集・アジアからの出稼ぎ女性たち なぜ日本に来るのか

現地レポート フィリピン・タイ・台湾・韓国・沖縄  
人権を守るための活動から



写真・タイの少女たち 撮影・猪尾ひかり



No.20

1989.10

女性差別・民族抑圧からの解放をめざして!



# アジアからの出稼ぎ女性の人権を守ろう！

「妓生(キーセン)観光反対！」——韓国の金浦空港に女子大生がデモをかけ、日本人の「買春ツアー」に初めて公然と抗議の声を上げたのは一九七三年であった。その後、台湾の旅行業者が「恥という字を存じますか」という意見広告を出したほど、日本人男性のセックス・アニマルぶりはひんしゆくを買った。

こうした抗議の声に呼応して、私たちアジアの女たちの会は七七年の結成当初から、買春観光反対運動を活動の重要な柱にしてきた。しかし、私たちの精力的なキャンペーンにもかかわらず、買春観光は韓国、台湾から、フィリピン、タイ、インドネシアなど、アジア各国に広がった。反対運動を意識した旅行業者のたぐみな実態隠しもあって、アジアからの買春観光反対の声もかき消されたかに見えるが、円高日本は今年ついに海外旅行一千万人時代に入り、買春観光はかつてない規模にふくれあがっている。

そのうえ、八〇年代にはいつて、アジアから女性たちを日本に連れて来て、性風俗産業で働かせるアジア出稼ぎ女性の時代を迎えた。アジアの国々では経済開発が進んだが、それは日本など先進国本位の開発であり、貧しい人々を一層貧しくさせ、若い女性たちがその犠牲になって、都会の性産業に、さらに、海外へと押し出されるようになったからである。

こうして、日本に人身売買の形で送られてくる出稼ぎ女性たちは年七、八万人にも激増し、最底辺の性産業労働者として、性的搾取を受け、人権侵害に苦しんでいる。日本の性産業が肥大化し、性の商品化が進んで、アジアからの安価な性労働力へ需要が増大する

一方なのだ。それは、日本の経済体制が日本女性の差別に拠っているだけでなく、アジアの女性たちからの収奪に拠っていることにほかならない。

アジアからの女性たちは性差別のうえに、アジア人蔑視という人種差別も受け、さらに、その多くは不法滞在、不法就労を理由に、侵害された人権を回復する手だてもないまま強制送還されてしまう。日本政府は、八〇年代半ばからアジア各国からの男性出稼ぎ労働者が急増し始めたため、外国人労働者締め出し政策を強化するねらいで、入管法改悪を繰り返している。この改悪案に私たちは反対する。こうした政策のもとでは、出稼ぎ女性たちはさらにひどい性的搾取や人権侵害を受けることになるからだ。

私たちは、アジアからの出稼ぎ女性たちが、たとえ、入管法違反の来日であっても、彼女たちが人間として扱われるように、日本政府にまず要求したい。そして、私たち自身も、彼女たち一人一人を友人として受け入れ、その人権を守るための活動をさらに強めなければならぬ。

しかし、もっと根本的には、アジアの若い女性たちが、異国に出なくとも、自国で家族や友人とともに、人間らしく生きられるように、経済大国となった日本とその犠牲になっているアジアの国々の間の不正な経済構造を変え、私たち自身の生活のあり方を変える、という長期的な闘いに挑まなければならない。

日本国内での女性差別に反対し、アジアの女性たちの人権を守る日々の活動と、日本企業の進出や日本政府開発援助(ODA)など開発政策を問う運動とをどう結びつけるか、九〇年代の私たち日本の女性に課せられた課題は重い。それをアジアの女性たちとの連帯を深める中で果して行きたい。

一九八九年 十月

## アジアの女たちの会

# 序 出稼ぎ女性 たちは今…

## アジアからの

### 出稼ぎ女性は今なぜ日本に来るのか —送り出す途上国と受入れ国日本の構造—

日本ほど多くのアジアからの出稼ぎ女性を性産業労働者として受け入れている国はない。七〇年代のセックス・ツアーの歴史を振り返ると、日本の男性たちの買春観光先はまず台湾から始まり、ついでソウルに移り、さらにマニラ、バンコクと東南アジアへ広がった。年間何十万という数の男たちが団体を組んでアジアの女性たちの体を金で買うために出掛けるという異様な状況になったのである。

このような金にあかせた性的搾取に最初に抗議の声をあげたのは、韓国の女性たちであった。七三年、女子大生たちがソウルの金浦空港に「祖国を日本人男性の遊廓にするな」というプラカードをかかげて小さなデモをしたのである。それが日本女性たちのキーセン観光反対運動を起すきっかけとなった。それがさらにアジアの女たちの会を作ることになったのである。

八〇年秋には、マニラで国際観光問題会議が開かれ、日本で買春ツアーの実態が国会でも取り上げられて、全

国的に知れ渡った。翌八一年一月、当時の鈴木善幸首相がASEAN諸国を歴訪したとき、マニラやバンコクで女性たちの抗議デモで迎えられた各国で広く報道されて、マニラへの日本人観光客は激減した。

ところが買春の背景にある途上国側の経済状況はそのままのため、貧しい女性たちは日本への出稼ぎに活路を見いだそうとした。買春観光を通じてできた人身売買ルートで、両国の業者は女性たちを日本へ送り込むことで巨利を得ようとした。

こうして、八〇年代になって、来る出稼ぎ女性が年々ふえていることは、不法滞在で摘発された人数の推移(一)からも明らかだ。最近では年間七、八万人にも達すると推定されている。その大部分が各種の性産業で働いているのである。(表2)

このような日本への出稼ぎ女性の急増をまず国際的にみると、南北問題の一環だということ、つまり、南の途上国から北の欧米諸国と中近東の産油国へ何百万という人々が出稼ぎにいくというグローバルな出稼ぎ

の流れの中でとらえる必要がある。イスラム国からは男性だけが、ほかのアジアの国々からは女性も少なくない。

アジアで、パキスタンについて大量の出稼ぎ労働者を海外に送り出している国はフィリピンで、百カ国以上にざっと二百万人にものほり、四、五人に一人は女性という。香港には四万二千人、シンガポールには三万人以上のフィリピン女性たちが家事労働者、メイドとして働いており、アメリカなどには看護婦として働きに出ている。その中で、日本にはもっぱらエンターテイナーとして送り込まれているという特色がある。

なぜ彼女たちは故国を離れて、異国で外国人男性に性サービスをするような仕事につかねばならないのだろうか。第一は、貧困のためで、最大の送り出し国フィリピンの場合、失業率が非常に高く、学校を卒業しても四人に一人しかまともな就職が得られないという。また、たとえ職についてもきわめて低賃金で大勢の家族が食べて行くのは大変なのだ。月給

表1 入管法違反、男女別事件の推移

性別	年	1983	1984	1985	1986	1987	1988
	数	4,768	6,830	7,653	10,573	14,129	17,854
総	男	1,102	1,213	1,644	3,325	5,636	10,725
	女	3,666	5,617	6,009	7,248	8,493	7,129
構 成 比	男	23.1	17.8	21.5	31.4	39.9	60.1
	女	76.9	82.2	78.5	68.6	60.1	39.9

が千ペソ(五千円)ぐらいいで、日本では日給に相当するぐらいの開きがあるので、単純化していえば、日本で一日働けば一カ月分の稼ぎになるわけだ。

つぎに、フィリピンは伝統的に海外移民、とくに、アメリカへの移民流出が戦前から盛んだったが、マルコス政権時代からとくに失業対策と外貨獲得のために、国策として人権輸出政策をとってきた。アキノ政権にかわっても、対外債務はかさむ一方で、労働力輸出は奨励されている。もうひとつの要素は送り出し国と

表2 資外活動事犯及び資格外活動がらみ不法残留国別、年次別推移

国籍	年	1983	1984	1985	1986	1987	1988
総数		2,339 (200)	4,783 (350)	5,629 (687)	8,131 (2,186)	11,307 (4,289)	14,314 (8,929)
フィリピン		1,041 (29)	2,983 (96)	3,927 (349)	6,297 (1,500)	8,027 (2,253)	5,386 (1,688)
タイ		557 (39)	1,132 (54)	1,073 (120)	990 (164)	1,067 (290)	1,388 (369)
中国		528 (85)	466 (136)	427 (126)	356 (161)	494 (210)	502 (230)
韓国		114 (24)	61 (34)	76 (35)	119 (69)	208 (109)	1,033 (769)
バキスタン		7 (7)	3 (3)	36 (36)	196 (196)	905 (905)	2,497 (2,495)
バングラデシュ				1 (1)	58 (58)	438 (437)	2,942 (2,939)
その他		92 (16)	138 (27)	89 (20)	115 (38)	168 (85)	566 (439)

日本側を結ぶ暴力団など非合法組織による人身売買ルートがアジア全域に広がって麻薬、武器取引と並んで資金源になっていることである。フィリピンについて来日出稼ぎ女性が多いのはタイからだ、昨年あたりからのタイ女性の急増の背景にはタイ側に送り出しルートができたこともあるという。三番目の台湾も二大秘密結社が女性売買に関わっているとみられている。

さらに、根本的な経済要因として、都市の富裕階級中心の開発で農村は貧困の中に残り残され、しかも、消費文化がテレビ・ラジオを通じて村まで浸透する状況では、現金を得る方法として、娘を売るということが起こっているのだ。

ここには、経済的要因に加えて、

あきらかに女性差別の問題もからんでいる。出稼ぎ女性に家族関係をきくと、長女が圧倒的に多い。まだ十代の若い女性たちが大家族の家計を補い、弟妹の学費を得るために、異国に出るのである。

バンコクの緊急避難ホームでは、売春宿から救出されてきた少女たちの中にはまた舞い戻ってしまう場合もあるという。売春をやめては両親が困るのではないかと案じるからだ。警察の手入れを受けて女性たちが去ったあとに残されていた手紙には、自分が家族のために犠牲にならなければという責任感が行間に滲んでいた。

タイ北部のパヤオからの十五歳の少女は、「お父さん、ここではいじめられるし、とても淋しいから、お米の収穫が終わったら会いに来て下さい。でも心配しないで。どんなにつらくても、家を建てるお金をかせぐまで、ここががんばります」と書いていた。

また、父親からの手紙も残っていた。「業者から最近千バーツ受け取った。お前が出かける前に受け取った千バーツ(五千円)と合わせて二千バーツ(二万円)しか受け取っていない。業者は四千バーツ払ったとお前にいつているそうだが、私は一生懸命働いている。お前も我慢してほしい。」

こうしてわずか一万円で売られた少女は今日もバンコクの薄暗い売春宿で毎日五人も十人も客に幼い体を弄ばれているのだ。このような父親の娘の性に対する支配は女性差別以外のなにものでもない。たとえ、いくら貧しくても親が娘を売ること

を問うべきだ、という主張も出て来た。タイのフェミニスト、スカニヤ・ハントラクンさんは、八三年にオーストラリアで開かれたアジア学会主催の女性会議で「親は親行だと礼讃されるという親の権威が問題」と指摘した。バンコクの児童の権利擁護センターも「親が娘を売ることと止めさせない限り少女売春のような人権侵害に歯止めをかけることは出来ない」と、親を処罰する法律作りを急検討している。

台湾でも少女売春は深刻な問題になっている。とくに、山地原住民の

少女たちが人身売買の犠牲になり、台北の売春婦の四割もが原住民少女だという。原住民は台湾の人口の二%しか占めていないのだから、大変な高率である。このため、女性グループが台北の売春の本場である華西街で「山地少女売買反対」のデモをした。八七年二月のことである。

台湾から日本への出稼ぎ女性はフィリピン、タイに次いで多いが、その中には原住民の女性もいる。台北郊外の川べりにへばり付くような原住民部落をたずねたら、老人たちは丁寧な日本語を話した。ひとりの老人が東京に行っているという娘の話をしてくれた。「お茶の商いをして

いるとかで、時々仕送りをしてくれます。でも住所を書いていないのでどこに住んでいるのかは知りません」というのだった。彼女の仕事は容易に想像がついた。掘立て小屋のような住まいから出て来たこの老人の経済状態を見れば、娘の日本での稼ぎは死活問題なのだ。私は、この娘が、人権侵害を受けないように心のなかで、祈っていたのだった。

国境を超えて、女性の人身売買が広がっていることも、経済的要素プラス女性差別が原因である。日本に急増するアジアからの男女出稼ぎ労働者に共通しているのは、貧困の問題だが、女性の場合は、それに、女

性差別が、からんでいるのだ。日本独特の、伝統的な性差別を資本主義的利潤追求のシステムが最大限に利用する形で、性の商品化が極端にすすんでいるからである。

なぜ、日本には年間七、八万人にものぼる出稼ぎ女性が来るのか。それだけの需要がある、つまり、それだけ、性産業が発達、繁栄しているということである。東京・新宿の歌舞伎町はわずか〇・三四平方キロなのに、なんと二千五百軒ものバー、クラブ、スナック、キャバレー、テレフォンクラブ、ストリップなどあらゆる種類のセックス産業の店が密集しているし、全国津々浦々、どんな辺鄙な田舎の温泉場にもアジアからの女性が働いているという状況になっている。

こうしたセックス産業に、女性をアジアから供給する役のリクルーターは、全国で三百ぐらいといわれるが、それに暴力団が絡んでいる。つまり、女性売買は暴力団にとって格好の資金源なのだ。暴力団は、麻薬、ビストル、女の密輸入で利潤をあげているわけだ。このような暴力団の存在を日本社会は黙認している。それどころか、礼讃するような本や映画が氾濫しているのだ。大体百万円ぐらいで女性を輸入して、百五十万円から二百万円ぐらいで、クラブ

やスナックに売るわけで、女性を仕入れた店は、元をとってさらに儲けるために、女性たちに売春を強いるわけだ。抵抗すれば、殴る、蹴る、麻薬を打つ、賃金を払わない、レイプするなどあらゆる手で、売春させ搾り取るのだ。

このようにアジアからの女性たちを搾取している経営者を売春防止法で、たまたま、手入れをすれば、彼らがいかに、ホロ儲けしているかが、あきらかになる。タイ女性を十人以上使っていた業者が昨年(八八年)売防法違反で検挙されたが、タイ女性の方は、成田空港にいっバス代さえないのに、業者の方は半年たたないのに、六千万円も儲けていたことがわかった。それほど、セックス産業は儲かる商売なのだ。

このように、高利潤をあげられる性産業がここまで繁栄しているのは、日本独特の売買春文化の伝統があることも見逃せない。室町時代に幕府が公娼制度を認めて以来、江戸時代には廓文化が開花して、四世紀にわたって売買春が正当化されて来たのだ。とくに、儒教に縛られていた武士階級は、性については、ダブル・スタンダードの規範をもっていた。彼らは、封建的家制度を継ぐ子供を生む妻と、性的快楽のための廓の女、遊女を使いわけた。このように、女た

ちは良い女と悪い女に二分化する考え方は、現在まで受け継がれ、主婦と娼婦、水商売の女に分断されている。ここに、福沢諭吉も唱えた売春婦必要論、防波堤思想が出て来る根拠がある。

アジアからの来日女性にも、これはあてはまり、沖縄では、「フィリピン女性が来るお陰で、沖縄女性が「護られる」といった議論がおおっぴらにまかり通っている。また、アジアからの花嫁さんが八〇年代なかばから、急増しているが、花嫁輸入でいうけている国際結婚仲介業者たちは、日本の男性向けに「見合い相手のアジア女性は、日本語を話せない、日本に行った前歴のない女性たちです」と、かつて、日本の性産業で働いた事がない女性だと強調している。つまり、アジアからの女性たちと遊んでいながら、いざ、結婚相手となると、そういう女性には「ノー」という身勝手さ。ここにも、あきらかに、女性を二分化する思想が表れている。

このような状況のなかで、性産業で働く日本女性たちは、生活のための中高年で子持ちの女性が結構多い。日本では女性の平均収入は男性の約半分という、基本的な性差別のため、夫の病氣や離婚などで生活を支えるだけの収入を得るためには、夜の仕事しかない現実があるのだ。確かに

派遣型売春など多様化する売買春に流れ込む若い風俗ギャルはいるが、それでも、ふえる需要に比して絶対的に不足している若年労働力をアジアからの出稼ぎ女性輸入で補っているわけだ。

需要がふえるのは、それだけ買春日本男性が増えているわけで、女性をとことんまで商品化する性情報に刺激されながら、企業人間としてのストレスの解消をもとめて、男性たちは性産業に群がっていく。厳しい競争原理と異常な長時間労働(日本の年間平均労働時間二千百時間以上で、西欧諸国は千六、七百時間)という犠牲のうえに経済大国を築いた日本。それは性産業の肥大化も伴ったのであり、そのように、男性も、女性も非人間化する苛酷な経済システムそのものを問わなければならない。

このように、アジアからの出稼ぎ女性を通して見えて来るのは、伝統的な女性蔑視や現在の男女不平等など女性差別であり、それを最大限に利用して成り立っている日本の経済構造である。そして、アジアの女性たちを性的に搾取する南北問題である。つまり、女性が差別され、人間として扱われないからこそ、日本の経済発展があったという関係をきちんと思えばならないと思う。



# 1 出稼ぎ女性 たちは今…

## 名古屋「ラバーン事件」告発!! —東京でフィリピン・日本女性合同集会—

松井 やより

ひどい人権侵害を受けた四人のフィリピン女性たちが裁判を起こした名古屋のラバーン事件を通じてアジアからの出稼ぎ女性たちのことを考えようと、アジアの女たちの会が東京在住のフィリピン女性と日本女性の合同集会を八九年六月二十五日、東京山手教会で開いた。立ち寄りセンター作りを進めているメンバーが中心になって、会としては初めての在日フィリピン女性たちとの共同行動を企画したのだったが、会場に入り切れない



いぐらいの二百人近い参加者があり、熱気にあふれる討論となった。これからは日本女性だけでなく、在日アジア女性たちと共に、出稼ぎ女性の人権を活動をしなればという重い課題を突き付けられた集会であった。ラバーン事件(次ページ参照)は七、八万人にのぼるアジアからの出稼ぎ女性が人身売買の被害者として日本に送り込まれている実態を暴露するような事件で、全国各地の性産業で働くアジア女性たちの身に日々起こっている人権侵害のまさに氷山の一角である。

アジアの女たちの会の立ち寄りセンター運営委員会のフィリピン・メンバーはこの事件について知ると、同胞女性として何かしなければと反応し、運営委員会として早速ラバーン事件の裁判闘争を支援している名古屋のあるすの会の五月二二日の集会にメッセージを送った。そして、東京でも集会を開くことをきめた。何しろ日英両国語でのチラシ作り、当日の資料作り、日本のメディアだけでなく、外国人ジャーナリストた

ちへの宣伝など慣れない準備だったが、わずか一カ月に日本人メンバーもフィリピン人メンバーも総力をあげた。集会参加者の半分近くがフィリピン人という予想以上の反響に、このような連帯集会が開かれる時代になったのだと、在日外国人のこの問題に対する関心の大きさを改めて実感させられた。

集会はまず、あるすの会の野上幸恵さんの発言から始まった。カトリック・シスターとして、アジアからの出稼ぎ労働者の支援に飛び回ってきた体験に根差した言葉には心打たれるものがあった。

「四人の女性たちは危険なし、売春なし、といわれて日本につれて来られ、ストリップ劇場を回されて、ラバーンに送られ、売春とわかって逃げようとした。二人は逃げたが、連れもどされ、あとの二人は殺すと脅されていた。実際、ユキと呼ばれた女性は、この店が『男の天国マヒルカン』という名前だったときに働いていたが、山梨県へ逃げて焼き殺された。フィリピン男性が犯人とされ、

服役中だが、店との関係など疑惑がある。もう一人、ここで働いていたマリイは静岡で栄養失調で死んでいた。

私達は、彼女達がたとえ、入管法違反であっても、どのような権利を持つていいのか、彼女たちを黙って帰らせるのではなく、知らせるべきだと、裁判を起こすように支援体制をとった。彼女達は、裁判で明らかにしたくないことも明らかにするとう痛みを身に引き受けて、他の多くのフィリピン女性が人間の尊厳を守られるために、裁判をやると言っている。その勇気に感謝したい。その勇気に力づけられて、きつい裁判につきあっている。最後に彼女達に代わって皆さんにお礼をいいたい。」

次いで、フィリピン・メンバーのテシー・上田さんが、フィリピン女性の相談に乗った経験を交えながら、「交番の前を通るとフィリピン人の写真が張り出してあり、犯罪者なのかと思ったら、行方不明者の写真と知って、本当に悲しくなり、無事で見付かるようにと祈っている。

私の近所の人の友人ルディはホステスとして来日したが、ノイローゼで不眠症になった。しかし、健康保険に入っていないので金がかかると病院にも連れて行って貰えずに帰国させられた。マネージャーにとって

は金のことしか頭にないのだ。成田空港から『殺されそうだから助けて』という電話をもらったこともあるし、自殺したフィリピン労働者の話も聞いた。

言葉の障害もあるし、不法滞在なので脅えているのだ。そのうえ、不法労働者は同じフィリピン人から付き合うなどと、差別されている。不法入国者でも一人の人間であり、なぐったり、殺したり、非人道的な扱いはされてはならない、と日本の皆さんに訴えたい」と、切々と語った。

次に私、松井から、ラバーン事件のような人権侵害が起こる日本社会のあり方を問い、アジアの女たちの会がキーセン観光反対からフィリピン女性とのセックス・ツアー反対の共同行動、最近のタイ女性支援基金まで、アジアの女性たちとの連帯活

動の歴史を振り返ったあと、出稼ぎ女性の人権を守ることは、日本の女性自身の解放と、他国を犠牲にする日本の経済、社会構造の変革をめざすことにつながることを述べた。

次いで、フィリピン女性チケット谷崎さんの発言に移り、「私は二年まえに日本にきたが、殴られたり、給料を貰えない出稼ぎ女性のケースを知っている。日本の活動家グループは、カワイソウという同情やあわれみでなく、立ち寄りセンターを作ったり、医療援助をしたり、さまざまな支援活動をしてほしい。それには、女性団体も、宗教者も、学生運動も、マスコミも、人身売買をなくすために、ネットワークを作って活動する必要がある。さらに、長期的なアプローチとして、日本の企業進出や観光もチェックしてほしい。とにかく、外国人出稼ぎ労働者たちを犯罪者扱

### 名古屋「ラバーン事件」の被害女性たちを訪ねて

八九年五月初め、フィリピン出稼ぎ労働者担当で大阪在住のラギダオ神父から電話があった。「四人のフィリピン女性がひどい目に合って裁判を起こしている。この事件をもっと広く知らせられたいだろうか」と達者な日本語でいわれた。これはまさに氷

山の一角、ほとんどの出稼ぎ女性たちが泣寝入りで、強制送還されてしまっ中、法的手段で自分たちの人権を踏みにじった男たちを訴えた彼女たちを支援すべきだと咄嗟に感じた。

彼女たちは名古屋市中南区のスナッ

いせず、在留許可を与えるよう、政府に働きかけて欲しい。そのために日本人もフィリピン人も手を携えてやりましょう」と訴えた。

この後、フィリピン人メイドさんたちの好意によるコーヒー・ブレイクがあり、「アジアからの出稼ぎ女性たちの人権をどう守るか」の討論に移った。ラバーン事件について、「なぜ、強姦などの訴えを検察側は認めなかったのか」などの質問や、「出稼ぎ労働者に特別在留許可を認めるように運動すべきではないか」などの提案が出たり、活発な質疑で、予定時間を一時間もオーバーして、集会を終わった。参加者の中から、立ち寄りセンター作りに協力したいという申し出もあり、アジアの女たちの会の出稼ぎ女性支援活動が前進することが期待される。

ク「ラバーン」で昨年働いていた二一才から二六才の出稼ぎ女性たちで、売春を強制され、逃げようとしたため、店の従業員から残酷な仕打ちを受けたのだった。居室に鉄格子をはめられ、常時男たちが監視し、まさにタコ部屋に監禁され、レイプ



フィリピン女性が編集した日本への出稼ぎの危険を警告するタガログ語のマングイドブック。

までされた。

彼女たちを救出しようとした日本人男性二人が半殺しの目に合ったため刑事事件になり、経営者や従業員が逮捕されたが、暴行を受けつづけていた彼女達はすんでのところまで強制送還されそうになったのだ。これほどの人権侵害を見過すことはできないと、あるすの会が裁判闘争を支えている。

とにかく四人の女性に会わなければと思った。今、生活のために別々のところで働いており、裁判の時だけ、顔を合わせるといふ。たまたま、ある日曜日の午後、法廷での尋問の予行演習のために、裁判を支援している名古屋のあるすの会(滞日アジア労働者と共に生きる会)に集まるというのでかけた。

四人のうち、四日市で働いている



愛知県警察が買春  
比女性、怒りの証言  
ラバーン事件 飛び火  
捜査情報を注

Cさんがケガで来れなかったが、あとの三人は弁護士に質問にしっかりと答えていた。まだはたちそこそこので、貧しい国に生まれたがゆえに異国で地獄の体験をくり抜けてきたというのに、実に毅然とした態度なのでかえって心が痛んだ。みんないかに人なつこく、初々しい女性たちだった。さすがに、ラバーンでこのことになる、涙ぐんでいたが。一体彼女たちはどのような目に合ったのか……。

Jさんは昨年八月、売春の仕事で嫌がったため、店長と従業員に殴る蹴るの暴行をされ、血まみれで夜中に逃げ出し、南署に助けを求めた。しかし、ケガをした理由も聞かず病院に送られ、南署が店に連絡したため連れもどされてしまった。スキを見てまた逃げ、タクシードで大阪まで行き、ストリップ劇場で働き始めたが、昨年暮れ、ラバーンの男たちが来て、無理やり名古屋に連れもどされたうえ、ホテルで、ピストルで脅されながら、レイプされた。

Rさんは昨年来日、ラバーンとストリップ劇場とかけもちで働いていたが、給料も僅かしかもええ十一月に逃げ出して、ほかのスナックでホステスになったが、十二月にラバーンに連れもどされた。そこで、アザができるほど殴られたうえ、鉄格

子の部屋で二人の従業員に店長ら他の二人の男たちが見ている前で、レイプされた。思い余って「監禁されているから助けて」という手紙を客のひとりに託したことがきっかけでこの店のことが明るみに出たのだった。

Mさんは、昨年静岡で、栄養失調同然で亡くなり、死後十日ぐらいたってから発見されたフィリピン女性の妹だ。この姉も一時期ラバーンの前身の店で働いていて、売春の仕事がいやで静岡に逃げたという。「お姉さんは子供が二人いたんです。死んだという知らせに悲しくて泣きつづけた。お姉さんの死因には不審な点があると聞きました」とMさんは涙ぐんだ。彼女は、ストリップ劇場を十個所ぐらいいも転々とさせられた後、昨年十月からラバーンで働き始めたが、婦人科の病気で下腹部が痛かったので深夜客を取るのを嫌がったら、従業員が殴りつけて無理やり客を取らされたという。

Cさんも、毎日、四、五人の客を取られ、店主にも性サービスさせられ、何かにつけ、殴られた。

このような人権侵害に対してあるすの会が支援して、四人の女性たちは店主や従業員の男性たちを売春強要、監禁、強姦、傷害などで、一月九日告訴、名古屋地裁で裁判が行われ、七月に判決が出た。それは懲役一年二月など、かなりきびしいものであった。しかも、裁判官は判決の中で「国籍の如何を問わず、不法滞在、不法就労や言葉の不自由などの弱みにつけこんだ外国人出稼ぎ労働者の人権侵害は許されないと強い調子で外国人労働者への差別をいませめた。このような不法滞在外国人の人権にふれた判決は初めてで、あるすの会を初め全国的な支援運動の成果といえる。

しかし、四人の被害女性たちが訴えた売春強要や強姦など九つの罪状のうち、監禁と傷害以外は検察段階で不起訴になっており、あるすの会は検察審査会に再調査を求めている。フィリピン女性たちは裁判が終わったということで八月末に強制送還され、フィリピンのマスコミがラバーン事件を大々的に報道したという。彼女たちが異国で心身に負った深い傷が一日も早く癒えて、力強く生きるように願わずにはいられない。

(松井やより)

## 2 出稼ぎ女性 たちは今…

# フィリピン・頭脳と労働力の輸出

マリー・ルウ・アルシッド  
・アジア太平洋地域出稼ぎ労働者調査センター

### 歴史的背景

フィリピン人の頭脳や労働力の輸出はアメリカの植民地時代に始まった。ある文献によると移民の波は大きく三つに分類される。最初の波は一九〇〇年から一九四六年、二番目が一九四六年から一九七二年、そして第三番目が一九七三年から現在である。

第一期の移民は、米国の移民法によって厳しく入国を制限された日本人と中国人の労働力を補うためにハワイで働くプランテーションの労働者としてであった。一九〇六年から一九三四年の間、約一十一万人のフィリピン人労働者がハワイ砂糖プランテーション協会と契約を結んでいる。

そのほとんどが、地方から来た教育の低い男性たちであった。(一九一六年から一九二〇年はセブとネグロスから大半をしめたが、一九二五年から一九二八年の間は、彼らの出身地の多くは北部ルソン島にとつてかわった。そしてイロコス地方の人

たちが五八%にもなった。次にフィリピン人労働者はハワイからアメリカ本土に移り、人々がやりたがらない賃金の低い、果樹園労働等に就くようになった。

第二期の波というのは「しずく」の落ちるようなものであった。つまり米政府はフィリピンからの年間移民入国割りを押し付けた時期である。約二八〇万人のフィリピン移民たちがその間登録した。その多くが初期の頃アメリカに移住し、米国籍を取った人たちの親戚であった。彼らは技術をもっており、米社会に貢献した人たちであった。このような医者、エンジニア、科学者、看護婦や他の専門家たちの米国人への大量移民は「頭脳流出」と言われるものである。

第三期の移民(一九七三年から現在)は、第一期、二期に比べ、移民の場所、目的や、社会経済的な状況がそれまでとは違った様相を示している。七〇年代の初期、フィリピン人は、「一時的な就労のために地方から首都

マニラへ、又は中東の産油国へと出て行った。その数は、一九七五年から八二年の全フィリピン出稼ぎ労働者の八一%を占め、サウジアラビアへの出稼ぎ労働者は少なくともそのうちの七〇%を占めていた。今日中東には約二五万人の契約労働者が働いておりそのうちの七五%がサウジアラビアに集中している。ほとんどが男性で、工場、輸送関係や臨時労働的な仕事に就いている。

又女性の契約労働者の数が目立ちはじめたのもこの頃である。現在、フィリピン出稼ぎ労働者の三五%が女性で、主にメイド、女中、バーのホステスや売春婦等のサービス部門で働いている。

フィリピン移民の第一期とは対照的に、六〇年代後半から八〇年代にかけて出国したフィリピン人たちは、フィリピン労働者の中では最も知識的な人たちで、教育があり、技術をもっており働き盛りの年代であった。(七四、三%は四〇才以下で二二から三三才が四八、五%を占めていた。)三人に一人は専門的な又は高度な技

### 海外就労の理由

一九七八年、時の大統領フェルナンド・マルコスが失業問題を緩和し、外貨獲得を助長するために、労働力の輸出を政府の政策として公にかかげた。労働力の海外輸出は、フィリピンの伝統的な輸出以外の分野でたちまちにして、外貨獲得のトップに躍り出た。一九七八年から一九八三年の間の経済発展に三四億八千ドルにも昇る貢献をした。

アキノ政権になってもこの政策は維持され、さらに強化された。二九〇億ドルの負債をかかえ、失業率は一二%にもなり、フィリピン国民五千六百万人のうちのたった二%の金持がこの国の七〇%の資源(富)を所有し支配しており、八〇から八五%の国民が自らの労働力を海外へ売り七五%の国民が貧困ライン以下の生活をしている。我々の最も貴重な資源―つまり人間―の大量輸出が近い将来終るという可能性は全くない。それゆえ、この厳しい経済状況においてはフィリピン人はたとえどんなに遠くとも、どんなにリスクがあろうとも(特に日本での多くのケ



スである不法就労のような、社会的負担(孤独、家族や友人との別離)が、あろうとも海外出稼ぎを考えざるを得ないのである。

このような見地からしても海外出稼ぎという事実は送り出し国の社会経済的又、政治的現実が引き起こしたものである、という事を認めなければならぬ。しかしどうみても海外出稼ぎはこの国にとっては、一時的な間に合せの策にしかない。

### 出稼ぎ労働者の苦しみ

搾取はフィリピンでのリクルートで始まる。それは通常不法雇用(つまり手数料が支払われた後は何の仕事も与えられず、契約をした仕事と実際与えられた仕事が違ったりや過大に上乗せされた職業紹介手数料(六、百ドルから千五百ドル)の支払いである(最大の紹介手数料でもたったの二五〇ドル)。

合法、非合法を問わず日本で働らくエンターテイナーは、普通はリクルーターには手数料を払わないが、その人たちを除く海外出稼ぎ労働者は、要求された手数料を支払うために高金利で借金をしたり、家族の財産を売り払ったりするのである。家族は彼らのすべての希望をその出稼ぎ労働者の海外での成功にかけ、あらゆる支援をする。受け入れ国においては

フィリピン人がやる仕事は、その国の人やりたがらない卑しかったり、危険な職業で低賃金である。

#### 海外出稼ぎ労働者がかかえる共通問題

1 労働者の権利や福祉に関する法的保護の欠如。その原因としてa 中東、マレーシアやシンガポールのように、ある職種によって、受け入れ国の労働法の適用が受けられない。

b 日本のように「アンドキュメンテッド」(不法就労)という存在。このような状態は、雇用主により契約を勝手に破棄されたり、不公平な労働条件で働かされたり、他の形で搾取されたりする等、労働者を非常に不安定な立場に追いやってしまう。

2 契約の不履行。契約は雇い主と結ばれるので労働者は受け入れ国に着くなり、不利な条件で、雇い主によっていつでも他の労働に入れ換えられてしまう。

3 契約条件の違反—これらは賃金不払い、契約賃金以下の支払い、長時間労働、賃金不払いの残業等である。

4 女性への性的いやがらせや虐待—恥ずかしさや社会的不名誉等の理由から女性ほとんどレイプされた事など報告しない。そして女性

に差別的な法システムそのものが被害者の女性自身の告発を困難にしている。

5 「アンドキュメンテッド」(不法就労)という立場(身分)—日本エンターテイナーや建設労働者)のように、グリーガル(不法)ということは期限切れのビザで働いているので、労働者としての権利の主張は禁止されている。一般的な考えとして、不法就労者はいかなる権利や恩恵も与えられていない。しかし、日本のアジア人出稼ぎ労働者支援グループに指適されたように、合法労働者に適用されている基本的権利、つまり雇用主からの不払い賃金の請求権などは不法就労者にも認められるべきである。

### 結論

フィリピン国内で社会的政治的経済危機がさらに悪化する状況の中で、労働力の輸出は政府の経済政策の一環として続くであろう。移民労働政策の主要な支持者として、フィリピン政府は、海外労働者の権利や福祉の向上に努力すべきである。

とは言えそれは残念ながら、労働者のニーズや問題に適切、かつ満足には答えていない。

従って、自らの生活や労働条件の



## 3 出稼ぎ女性たちは今…

# 日本の女性たちへ

今日は私が日本にきている七、八万人といわれるフィリピンからの女性たちを代表して、日本の女性たちが何をしたらいいのかしぼってお話ししたいと思います。

フィリピンの女性たち、特に、エンターテイナー、娯楽産業従業員、売春婦として働いている人達は、この日本の社会である役割を果していると考えられます。それは、毎日の色々なプレッシャーやストレスで疲れた男性たちの逃げ場所としての、あるいは慰める役割です。

彼女たちのプロフィールはかなりわかって来ました。しかし、それでは、誰が彼女達のお客さんなのかという問いが出てきました。顧客のプロフィールは、日本のあらゆる種類の男性達だということです。こういう女性たちを買っているのはあなたのお父さんかもしれない、あなたのダンナさんかもしれない、お兄さんや弟さんかもしれない、会社の同僚かもしれない、毎日通勤電車と一緒に通っているビジネスマンかもしれない

のです。

私が日本各地を旅行したときに、この客の中に、あらゆる職業の人々、農民も、普通の労働者も、日雇い労働者も、ホワイトカラーのサラリーマンもいました。年齢も若い人から年寄りまで幅広く、歌舞伎町のシヨロを見に行ったら中年サラリーマンにまじって、学生たちもたくさんいたのにびっくりしました。

フィリピンの女性として日本の男性、女性に聞いてみたいのは、なぜそういう風に娯楽を求めなくてはいけないのですか、ということ。フィリピンからやって来る女性たちにはもう一つ違った形があります。それは、花嫁さんたちです。これは、明らかに、日本の農業の危機のためです。この問題では決まった答えが返ってきます。「女性たちは大都会で働き、独立した生活をしたかったので、田舎には花嫁になる女の人がない。彼女達は農家に引きこもって農業をすることなどできなくなっているんだ」というんです。

## リサ・ゴー

●フィリピン問題資料センター

日本は工業化は大変進歩しましたが、工業化だけでは生活出来ません。日本の国民と社会に食糧を供給しなければならぬからです。農村に女性がいるいかにかわらず農業は続いてゆかなくてはならないのです。村が存続していくためには子供が生まれなくてはならないのです。

日本政府は牛肉、オレンジの輸入要求があっても、日本の市場をアメリカやオーストラリアからの牛肉、オレンジで満杯にしようとは考えていないのです。日本の農民や農業社会をそれなりに保護しなくてはならないと考えています。ところが、そ



リサ・ゴーさん

の農村が人々の都市への流出でどんどん空洞化しているわけです。そのような日本の農村を埋めようとしているのが、第三世界から輸入されて来た女性たちなのです。

花嫁さんといわずに、移民と呼ぶべきかも知れませんが、日本には様々な入国管理の規則があって、それを全部満たさないと正式に移民と呼べないので、私はとりあえず「輸入された花嫁さん」と呼ばせていただきます。彼女達は農村に嫁いで、実質的な役割を任せられます。

まず、農地に出て農業をやり、実際に日本の国民に食物を提供する役割を担っています。このような農業労働のほかに、家事をし、子供を生むわけです。彼女達の人間の再生産能力が村を存続させるという大きな役割を果しています。

このように、彼女たちは農業労働と子供を生むことで、村の人口の流出、女性たちだけでなく、若い男性も出て行くことによる村の絶滅から救っているのです。

なぜ、女性たちは田舎から都会へ出て行くのでしょうか。都会の魅力はなんでしょう。男性たちも都会へ、都会へと押し出してしまう日本の農業とは一体なんなんのでしょうか。私の見た日本女性という女性像についてお話ししてみたいと思います。



去年(八七年)十月に日本に来たとき、日本語の日常会話を覚えることから始めたんですが、最初は簡単だと思いましたが、ところが、そのうちに、女ことばと男ことばがあることがわかって、日本語を勉強するのを止めてしまいました。例えば、「おいしい」というところを「うまい」といつてみたり、「お元気ですか」を「元気かい」といつてみたわけです。このような言葉の使い分けが、私にとって日本にずっと生きていくためのひとつの障害という感じがしました。私は日本の年配の女性のところにも宿していたことがあります。日本の中年の主婦の生活と同じだと思うのですが、彼女は朝ご飯の支度から



洗濯、買い物、昼ご飯、夕食の支度、戸締り、そして家族のふとんを全部敷いてやまと寝る、という毎日です。田舎の女性の生活は、これに農作業が加わります。今は都会でも、パートタイマーという仕事で女たちに課せられてきました。様々な組織とのコンタクトで、出て来るのはいつも男性です。これは女性もたくさんいる政治団体などでもそうです。つまり、指導的な地位に女性が非常に少ないということ。女性は出産機能を備えているわけ、それは奪われてはならないものだと思えます。ただ、生まれて来る子供に価値観を与えるのが母親でなく、制度的に決められているようにです。子供達は小さい時から団体生活、団体精神を植え付けられています。母親とか家庭はこのような学校で決められた価値観に子供が従うようにサポートし、学校の望む子供に自分の子供がなるように努力しているように見えます。政府が決めている価値観に子供達が従うように、助けるのが彼女達の役割になっているのではないのでしょうか。このような社会の体制の中で、女性たちは非常に寂しく、大変な生活を送るようになってしまいました。男性たちは、自分の属する団体、グループの中にずっといますが、女性には

自分の小さなグループも組織もない。男性たちが、自分の社会の中で楽しんでる時に、女性たちは家という小さな箱の中に閉じこもってしまっている。女性たちが家という

## 日本の女性の重荷を第三世界の女性が負わされている

フィリピンでは、洗濯機とか掃除機とか電気製品をもっているのはお金持ちの家だけです。だから、フィリピン女性たちは、日本の女性を羨ましがっていますが、それは、表面的なことに過ぎないと思います。家電製品は女性たちが家事から解放するのではなく、もつと家の中に閉じ込めるものだと思います。もっと、危険なのは、女性たちが、マスメディアや企業の標的にされて、新製品が出ると買わずにいられないという消費の怪物のようになっていくことです。このように、怪物のようになり、消費主義で、必要によって物を買うより広告媒体で買いたい欲望がつけられていくのです。このような状況にいて、日本の女性たちは人生で一体何を望んでいるのでしょうか。これだけ安全な社会を女性たちに保障している日本で、日本の女性たちが、アジアから、第三世界からやって来ているエンターテイナーや出稼ぎ労働者や、輸入された花嫁たちの

解放の努力をし、解放されていると思えます。しかし、第三世界の女性たちが重荷を代わりに背負っているから、日本社会を回してきているから、日本の女性の解放が行われているという面はないのでしょうか。日本の女性たちが本当の解放をするなら、どうか他の人達に自分の重荷を押し付けずに、自分達だけで自分達の解放をして頂きたいと思えます。

本当の連帯とは「私はいやだから、あなたがやらないさい。そのために、私がちょっとお手伝いしましょう」というのではないと思えます。

日本での生活は、安全な飲料水もあり、フィリピンでは農業生産物はほとんど輸出されてしまっています。エビは輸出されてしまい、私達は食べられません。みなさんが割箸を捨てるとき、第三世界の森を捨てているのです。返子の池子の森を守る市民運動をしている主婦たちが割箸を捨てるのを見ると皮肉だなあと思えます。

日本での心地よい生活に浸って、それを問わずに生きて行くことは簡単です。ですから、このような問いかけをすること自体が、日本の男性にとっても、女性にとっても、一つの挑戦だと思っています。日本の現実が他の人々の資源を搾取したもので

の上にあるということから目をそむけてはならないのではないのでしょうか。

第三世界からのエンターテイナーや花嫁さんのところへ行つて、「私達はあなた達のために闘っている」ということはできるでしょう。それでは、あなた達の社会の、あなた達の闘いはどうなんですか。

いま、第三世界では、人々はただ生きるために、または、生きるための基本的な人権を守るために、毎日闘っています。私達の闘いはとまることはありません。

フィリピンはかわいそうとか、出稼労働者はかわいそうと同情する「かわいそう症候群」は取り除いていただきたいのです。第三世界の人達と一緒に働くとき、または、助けるとき、そういう同情の気持ちは持たないでいただきたいのです。

フィリピンも日本も両方の社会がきつと変えられなければならないと信じています。



●消費税は廃止するべきやない！

全2巻 リクルートゲートの核心 消費税成立迄 二二六頁  
続リクルートゲートの核心 朝日ジャーナル編 山崎と巻引き 一三六〇頁

劇的勝利を獲得した女性党首の暮らしの論理 絶賛発売中！

国会で、海外で、集会で、人びとの心を熱く燃えさせてやまない。おたかさん、社会党委員長就任以来の三年間に内外で行なった主要な演説・講演などの全巻。一五四五頁

死を招く援助 開発援助紀行  
ブリギッテ・エララー著／伊藤明子訳／松井やより・大橋正明 解説 定価 1505円

国家開発援助ODAは貧しい人びとをより貧しくしている！  
西ドイツ元援助担当高官が現地視察から告発する、援助の驚くべき実態と改善の余地なき汚職の構造。

山崎と巻引き 一三六〇頁

矢来町43 すすさわ書店 東京新宿

ピルマの罠 荒井利明著 定価 1320円

八八年学生市民による民主化要求は軍事クーデターにより圧殺された。アジアに起こる政変はどこに向かうのか？社会主義一党独裁に未来はあるのか？

亜紀書房 千101 東京都千代田区神田神保町2-9 TEL.03-264-8301

豊かなアジア 貧しい日本 過剰開発から生命系の経済へ

中村尚司著 46頁 264頁 定価1550円

洗濯、食べもの、援助、暮らし……具体的な例とやわらかな感性で、過剰社会ニッポンの常識をひっくり返す。朝日、毎日他で大評判。

近くて近いアジア 朝日新聞社会部編(松井やより、津田邦宏ほか) 46頁 228頁 定価 1300円

「大きなニッポン」(動く外国人)「出稼女性たち」など、綿密な取材を通してアジアと日本の共生の道をさぐる。

学陽書房 千102 東京都千代田区富士見1-7-5 TEL.261-1111(代表)



## タイからの出稼ぎ女性たち

支援基金で連帯を

七〇年代の買春観光時代から八〇年代の海外出稼ぎ売春時代へ——日本の男性たちのアジア女性に対する性侵略は留まることを知らない。

年間七、八万人にものほるといわれるアジアからの出稼ぎ女性のうちフィリピン女性が七、八〇%を占めているが、最近ではタイ女性の増加が目立ち、しかも、ひどい人権侵害の犠牲になっている。東京の駆け込みセンターHELPLPに救いを求めるタイ女性はフィリピン女性を上回るほどである（一九八八年—タイ女性は一四四人、フィリピン女性は五一人）。そのうえ、タイへ強制送還されたら、今度は偽造旅券のために刑務所行き、自力で故国へ逃げ帰った場合には、人身売買組織の脅迫を恐れて潜行生活を強いられている女性もいるというのだ。こうした実情をなんとかしたいと、タイの女性解放グループ「女性の友」が、タイ海外出稼ぎ女性人権擁護プロジェクトを今年からスタートした。日本の女性も支援してほしいと要請を受けて、アジアの女性たちの会はこのほどタイ女性支援基金

（目標額年六〇万円以上）を設立して「女性の友」の活動を支えることにした。

タイ女性が人権侵害を受けやすいのはなぜだろうか——いくつもの要因が考えられるが、第一に、人身売買組織に騙されて初めて日本に送り込まれる女性が多く、英語も話せないため、自分が働いている場所や店に名前さえ知らないのだ。もう一つは、フィリピン女性たちはカトリックが多く、教会に救いを求めることもできるが、タイは仏教国だが、日本のお寺で出稼ぎ女性たちを受け入れるところは数えるほどしかない。

この春HELPLPにきた、一九歳のタイ女性Rさんは、アパートのような売春スナックに一年間も閉じ込められて、毎日四、五人の客に売春させられていた。逃げ出すスキをねらっていたが、ある日スナックの従業員が慰安旅行で出払ったあと、たつたひとつの窓が開いたのでそこからやっと思いついた。たまたま、出会った男性が同情して東京まで車で連れて来て、警察の前で降ろしてくれた。

松井 やより

そこからタイ大使館に送られ、強制送還されるまでの数日間をHELPLPで過ごしたのだった。

ところが、彼女は「どこで働いていたのか」と聞かれても「山がたぐさんあって、雪が少し降っていた」と答えるだけで、町の名も、店の名も何も知らなかった。「気分が悪い」というので病院へ連れて行ったら、妊娠二カ月とわかった。ショックを受けていたが「父親はわからなくても、生んで育てます」とRさんはきっぱりといった。彼女はまもなく、東京入管に拘留され、強制送還された。しかし、彼女は無事帰郷できたのだろうか。バンコク空港で偽造パスポートだとわかったと、警察に連行され、刑務所行きの憂き目に合うかもしれないからだ。

今年（一九八九）一月タイを訪問したさい、空港近くのドンムアン警察を訪ねた。担当者の話では、昨年、日本からの帰国者約三百人を旅券不正使用で取り調べたという。その九割の二七〇人が女性で、一昨年は百人以上だったのとは比べ、三倍近くの

急増ぶりだと、警察側も驚くほどの増え方だった。一五歳から二二歳ぐらいが多いということだ。

タイの旅券の偽造または、変造の場合は懲役一年半、マレーシアとか、シンガポールなど他国の旅券の不正使用だと八カ月の懲役に服さなければならぬという。保釈金は六万バーツ（三十万円）で、若い女性の月給が二、三千バーツという国では大変の高額で、日本で何の収入も得られず逃げ出した文無し的女性たちは到底払えず、拘留されたまま裁判にかけられる。罰金刑ですんだ場合もそれを払えなければ服役しなければならぬという。

たとえ、刑務所へ入らずにすんだとしても、人身売買組織の追及、脅迫を恐れて逃げ回るといふ悲惨な女性も少なくない。今回タイでそのような女性の両親を訪ねた。バンコクのラムカムヘン大学を卒業したWさん（二五歳）は、婚約者が入院したため、収入のいい仕事を探していたところ、知人から「日本で月給一万バーツ（十万円）でデパート店員の仕事がある」といわれた。友人と一緒に二人の男性に付き添われて一九八八年九月来日、長野県小諸市に送られた。二五万—三〇万バーツで売春クラブに売られたのだ。騙されたと思った二人は監視のスキを見て逃げ、

東京のタイ大使館に救出された。同行のタイ男性は現職の警官だった。Wさんたちは日本でパスポートを業者に取り上げられ、バンコクの空港から警察に連行されて取り調べられたが、そのさい、同行した現職警官のことを話したため、暮れに彼らは逮捕された。しかし、Wさんたちはリクルーターからの報復を恐れて、隠れていたのだった。「娘から電話はかかって来るが、居所は知らせてくれません」とWさんの母親は顔を曇らせた。

日タイ両方の人身売買組織は金を儲ける一方だが、女性の側はまさに踏んだり蹴つたりの目に合っているのだ。

タイの女性たちがこのような人権侵害の犠牲になっているのは何故なのだろうか。タイ側の事情を知りたい



バンコクのドンムアン空港近くの警察で日本から強制送還されたタイ女性の状況について聞くタイ女性の友のメンバーたち

いと思ったのだが、行ってみて売春のすさまじい拡大ぶりに仰天した。一九八四年、南部タイの観光地ブケット島で五人の少女売春婦が地下室に閉じ込められて焼死するという痛ましい事件がおこり、タイの女性解放グループが大々的なキャンペーンを組織したので取材に行ったことが思い出された。それから五年、タイの経済発展はめざましく、売春は下火になっているだろうと想像して行ったのだったが、実態はその逆で、少女売春は目をおおむばかりの爆発的拡大ぶりであった。

一月下旬、ちょうど、タイのもうひとつの有名な観光リゾート、パタヤ海岸に九千人の米海軍兵士が休暇で上陸し、R&R（慰安施設）、つまり、買春に殺到しているのを目撃したのだ。タイの女性解放グループ「女性の友」のメンバーとパタヤに行ってみると、ビーチ沿いの一、二本の通りにはゴーゴーバーやクラブやスナックなどが軒を連ね、日が暮れると、ネオンとサウンドの洪水のなかで、何百、何千という女性たちが米兵たちに性を売っていた。

その人数の多さよりも、彼女たちの年齢の若さに呆然としてしまった。一四、五歳の子が幼い体を白人の男たちに弄ばれているのだ。クラブによつては芸を売りものにしていて、

少女たちが舞台で性器を使って、字を書いたり、栓を抜いたりさせられていた。それを楽しむ何十人という男たちの目、目。少女たちは、男性たちの快楽の道具なのだ。

パタヤは普段は買春観光の本場である。日本の男性たちの姿は、こうした騒々しい場には余り多くはない。しかし、彼らは、旅行会社を通じて、一流ホテルへ女性たちを来させて買春するので目につかないだけなのだ。

バンコクにもどって、少女売春に取り組んでいる「子供の権利擁護センター」を訪ねると、「売春婦への需要が多くて供給が追いつかず、北部農村から売られて来る少女たちの年齢は若くなる一方だ。八十万人も少女売春婦がいる」となどとショッキングなことを聞かされた。

根本は農村の貧困、それに北部からが多いのは伝統的風習もある。しかし、観光開発と消費文化の影響の方が最近では深刻だという。農村を取り残した都市中心の経済開発が問題なのだ。そして、その開発には日本も深くかかわっている。政府開発援助（ODA）を通じて、また、日系企業進出によつてである。日本のタイへの投資ラッシュはすさまじく、一九八八年一年で過去二十年間分にも相当するという。

こうして、貧しい村の少女たちは

人身売買ルートで国内の性産業に売られるだけでなく、海外へ連れ出され、日本へまで売られて来るのだ。売春と知らずに来て、抵抗すれば、手ひどい暴力を振るわれ、麻薬を打たれたり、心身に傷だらけで、ほとんど一銭も支払われずにHELPLPなどに逃げ込む。売春をしなくていいと反抗したために、足に熱したアイロンを押しつけられてヤケドした少女や、麻薬を打たれて精神障害を起こした少女など痛ましいケースも多いという。

タイでは、ヨーロッパへ送られる女性のための相談、援助活動は、すでに数年前から、タイ女性情報センターという女性グループが始めているが、日本への出稼ぎ女性のための救援活動は、ようやく今年一月から「女性の友」を中心にスタートした。そのプロジェクトは、①人身売買の犠牲になった女性を法的に援助し、自立を支援する、②海外出稼ぎ先の国々での状況を知らせて、警告する、③日本などアジアの受け入れ国とのネットワークを作る、などの活動だ。日本がタイ女性の人権侵害に大きな責任がある以上、そして、同じアジアの女性として痛みを分かち合うがゆえに、日本女性としても、ぜひ「女性の友」の活動を支援していきたいと思う。



## タイ・経済成長の光と影

スリチャイ・ワンゲオ・チラロンコン大学・農村問題



私は社会学を研究しており、自分の社会を知ろうとしているわけですが、現実はいつも自分の知識より早く進んでしまう。いつでも新局面が出て来る。ですから学問は本で得る知識も大切ですが、現実に対応してゆこうとしている人びとの努力が私にとって大変勉強になっています。

たまたまタイで生まれた私が感じているのは、自分は被害者であって加害者でもあるということと言わなければなりません。タイは新興工業国・地域、「ニューズウィーク」でも特集で取り上げられているほどタイの経済は燃えているといわれています。どう燃えているのかは、先程のお話にもあったようなことです。この現状は日本とどう関係があるのかについてお話ししたいと思います。

## 開発のありかたと出稼ぎ売春

サービス産業の問題は国内の問題という人がいますが、僕はそうは思わない。売春をするのは、両親のためであるということ、人身売買とい

このような現状は日本は関係ないと考え人もいますし、いつか無くなると考えている人もいますが、この問題は国籍を問わず考えてゆきたいと思います。なぜ、新興工業国なるタイに売春問題の環境を作りだしているのかは、出稼ぎは特別な例として、どんな人でも関わり合う問題です。お互いの国について話しをする場合には光の部分ばかりが強調するのが一般的です。光の部分は良く見えやすい、場合によっては眩しくて他の部分が見えない。また、情報源の問題もあります。影の現実を知ろうとすることで、タイの現状がわかってくるのではないかと。タイの経済発展はめざましい、土地も高騰している。けれども海岸の人はリゾート開発で土地を買われて仕事ができなくなっている。

タイは経済だけでなく、教育水準もかなり発達している訳です。例えばタイ人の中学への進学率はフィリピンよりも高い、比較的高いといえます。今のタイでも新しい中間階層、ニューリッチといわれる人が出て来ています。しかし、このような状況で取残された人、地域はもっと大変です。下層階層の人との格差が縮まらない。今のタイにもいろいろな世界、経済成長の世界、ニューリッチの世界、そうでない大変な世界、もっと深刻な世界もあるのです。山岳民族の問題となると、もっと深刻。国籍、権利はよくなってきています。問題は複雑になってきていて、経済の波に巻きこまれ自分の生活を守れなくなり、みんなばらばらになっってしまった状況ができています。一般的に語られる経済成長は

嘘ではないが、みな一面でしかない。もっとバランスが取れた見方が必要です。日本でももっともっと、影の部分に目を向けるべきでしょう。

タイはこのままの状態が進んで行く、問題が大きくなって来ると思っています。特に女性問題は深刻です。経済発展は得る人、損する人の二極化が起きています。タイの経済成長は底辺に巻きこまれてゆく人がいる。

タイの経済の話をするとき、外貨獲得のこの一〇年間のベスト一〇はというと、もちろん伝統的には農産物ですが、畜産はいまは輸入になっています。ベスト一〇の中の一つに出稼ぎの外貨、観光産業が含まれます。タイの経済成長はどのような人びとのお陰で成り立っているかと考えれば、いろいろ問題が含まれていきます。最近の話では七〇年代からの成長がめざましくなっていますが、この三年間は著しく成長しています。八五年は、輸出は農産物よりも、製造業の輸出の方が多くなった。農業国タイが工業国になっていくことを表わしています。八六年から八八年は日本、台湾からの投資のお陰で経済成長率が2ケタになっています。最近の日本企業の一年間の投資額はこれまで二五年分よりも多く、タイ政府でもびっくりするほどなのです。

タイの工業化は第二の工業化の波、八〇年代は円高とタイの政策の影響が挙げられます。七八年にタイでは日本製品の不買運動をしました。これは外国の資本が四七%以上越えてはいけなかったのですが、八七年から一〇%外国資本でも許されるようになった。これは、外国資本が一〇%でも、製品を海外へ輸出すればよいこととされた。タイが輸出に重点を置いたばかりに、成長率は上がったが、外国資本の単なる増えにしかすぎないという結果になってしまったのです。

都市と農村の格差の問題も出てきました。日本とは、第二の工業化で

も言われた通り関わりが出てきています。タイの工業化は六〇年代ですが、それ以降もずっと日本との関わりが出てきています。年代を追ってみると、六〇年代は戦争の賠償の問題、特別賠償の契約を当時の池田勇人首相がたづねたわけですね。それが日本の進出のきっかけとなりました。七〇年代はみなさん聞いた事があると思いますが、日本製品不買運動、タイの民主化などがありました。八〇年代は日本との関わりはもっと深くなります。今までは製品でしか日本を知ることができなかったのが、日本人との関わりが増えました。現在、タイに住む日本人は三万人。元

談ですが、タイからの日本への出稼ぎ労働者は七千人で日本からの出稼ぎの人口が多いのです。タイに日本人村を作っているのです。日本との経済協力がタイにとって一番多いのです。この一〇年間、日本がアメリカを抜きました。統計をみると、経済協力の中身は六〇年から八〇年の二〇年間で、四〇%はダム建設、電力のためです。タイ人にとってエネルギーは必要ですが、これも日本の企業のためになっていました。

文化の面でも、生魚を食べないタイ人でも、最近では刺身を知らないタイ人はいないほどです。タイの農村の人で味の素を知らない人はいない。タイの農村の人は、日本という味の素しか知らないから、日本人を見ると「アジノモト」と声をかけてしまふんですよ。日本人のタイでのイメージは、つい企業や味の素といったものになってしまふんです。

タイでは、日本人は遊んでいる変な男達のイメージが強くなっています。個人としては、人間らしくつき合える日本人なのに、性的問題ばかり印象が強くなってしまったのだ。また、タイと日本の話をするとき、必ず経済の話になってしまふ。

経済を取り上げると、必ず国のレベルの数字しか出て来ない。成長を始めたこの二〇年間で少女売春が増

えている。経済成長率の数字だけを見ていてはよくない。その奥に隠れた影の部分が潜んでいるのです。

二番目には、経済の数字でタイを一元的に見てしまうことがあります。知らない内に経済の論理で人間を見てしまう事があります。バングラーシュの人を見るとあの人は経済成長率が低い国の人だから元気がないなどとか、タイの人を見るとあれはもう少し元気があるとか、一元的な目で人を見てしまふ。タイから出稼ぎに來ている女性で詩を書いている人がいる。その詩を読むと、聞いていると感心します。私もこの人のようにがんばらねばと思います。

三番目はわれわれのつき合い方で、企業や国家を通してのつき合いだけでなく、もっと市民とのつき合いという意味での真の国際化を作っていくのが必要。タイ人であるからとか、日本人であるとかという国籍を重要と考える以前に、まず人間であること、国境を越えたつき合いが必要で、企業で働いていても今のつき合いには満足していない人はいるはずなんです。人間としてのつきあいだけでなく、いろんなタイプの日本人、タイ人との交流を考えなければ、将来は見て来ないでしょう。人種、性を乗り越えてお互いに理解することが必要だと思っています。

タイ出稼ぎ女性の  
人権を守るために  
ご協力を！

女性の国際人身売買・性搾取をなくすために日タイ女性の連帯を！

募金目標額 年間60万円以上

一〇 A) 年 2000円 B) 年 6000円  
C) 月 1000円 (年12000円)

振り込み先は次の通りです。

郵便振替 東京 7-403279

(現金書留はご遠慮下さい)

アジアの女たちの会・タイ女性支援基金

★タイ女性支援基金グループは毎月第二月曜夜7時から渋谷コブで学習会や作業などを行っています。担当 村田則子 045-571-1180



# 出稼ぎ観光に来る韓国の女性たち

山口 明子

韓国の最南端、済州島（チェジュド）は、「ノービザで行けるレジャーパーラダイス」、「日本にいちばん近い海外レジャー・リゾート」と宣伝され、今、観光開発が盛んに進められている。だが、高層ホテルが立ち並び、高速道路が一周する済州島から、島の人たちは「いちばん近い海外」、日本へ出稼ぎにやってくる。不法入国、不法滞在、あるいは短期間の親族訪問という名目の正規旅券で、大阪は生野、東京は三河島の周辺に、ヘップ・サンタルのミシンを踏み、焼き肉の皿を洗いながら隠れ住む。

ソナ（仙花）さんもそのひとり。一九三七年生れだから、ヘバン（一九四五年の解放）の時には学齢に達していたはずだが、海辺の村で育った彼女は学校とは縁がなかった。その代り、祖母も母も、海女だったから小さい時からモグリを覚えて、アワビやワカメをとった。彼女の年代の男の子はもちろん学校へ行つたが、彼女は村の塾で読み書きを習った程度。やがて、結婚して町へ出た。

労働者として日本の海岸を渡り歩いた。だが、ソナさんの時代には、日本は旅券がなければ行けない国になっていた。平凡な主婦だったソナさんが出稼ぎに来る決心をしたのは、本土と日本の大資本の進出で夫の商売がニッチもサッチも行かなくなったからである。せめて、息子の学費ぐらいは自分の手で稼ぎたいと、中学生の末娘をおばあちゃんに預け、親戚を頼りに日本へ来た。

横文字のうまい旅行社の男に十万ウォンも払ってとってもらったパスポートと三カ月の親族訪問のビザ、チケットの入ったボートを肌身離さず、祖母や母たちがかつて「君が代丸」で渡った海をソナさんはあつという間に越えた。次の朝から、親戚のまた親戚の家で頼んでおいた仕事が始まった。婦人靴の甲の皮貼りで

東京の下町、薄暗い木造アパートの一室に一台のミシンがフル回転する。ミシンを踏むのは、とくにビザの期限の切れた中年の男、裁断台

解放前済州島の海女たちは、季節

ソナさんはその中で一人、合法的な旅券と外人登録を持っていて。来日して三カ月目、運のよいことに親戚のおばあさんが倒れて入院した。危篤の親族の看病ということで辛うじて滞在延長が認められたのだ。おばあさんは今、病状の安定をまって老人病院に送られたから、次には使えないだろう。それにあの入管の女性職員の刺すような冷たい目。書類の上を彼女のまなざしが走るたびにソナさんは足がふるえた。

## 薄暗いアパートの二室、仙花さんは、ひたすらミシンをふみ続ける

ソナさんはその中で一人、合法的な旅券と外人登録を持っていて。来日して三カ月目、運のよいことに親戚のおばあさんが倒れて入院した。危篤の親族の看病ということで辛うじて滞在延長が認められたのだ。おばあさんは今、病状の安定をまって老人病院に送られたから、次には使えないだろう。それにあの入管の女性職員の刺すような冷たい目。書類の上を彼女のまなざしが走るたびにソナさんは足がふるえた。

電気代を差し引くと、三人の取り分は決して多くない。手の込んだ注文だと一日六〇足位しかできないこともあるし、仕事の途切れる日もある。しかし、束の間の休日、男たち二人は安んじて外出もできない身の上である。病気になるっても、もちろん健康保険がない。若い男は視力の減退を訴えるようになった。医師は、視神経の使い過ぎによる過労と極度の精神的緊張から来たものだといって精神安定剤を処方してくれた。中年の男は十二指腸潰瘍を病んでいる。銭湯へ行くにも人目をばはかるような生活。だれかが戸を叩くたびにドキンと胸が高鳴るというのだ。

ソナさんはその中で一人、合法的な旅券と外人登録を持っていて。来日して三カ月目、運のよいことに親戚のおばあさんが倒れて入院した。危篤の親族の看病ということで辛うじて滞在延長が認められたのだ。おばあさんは今、病状の安定をまって老人病院に送られたから、次には使えないだろう。それにあの入管の女性職員の刺すような冷たい目。書類の上を彼女のまなざしが走るたびにソナさんは足がふるえた。

いつしよに行つてくれたいとこの妻に、「わたしのために、ねえさんにウソまでつけてすみませんね」と、たどたどしい日本語でソナさんは何度もうわびた。けれど、「おばあさんの看病」というのは滞在のための方便にしろ、それも本音で、ソナさんにとつてもおばあちゃんを見舞い、みとつてあげたい気持はやまやまである。仕事のあいまいにせめてウリマル（母国語）で声をかけ、あわびのおかゆでも食べさせてあげたい……。



네 말을 더럽히지 말라  
최현기 1989

韓国教会女性連合会作成の「女性と観光文化」資料集(1988より)  
「あなたの娘に遊女のわざをさせて、これを汚してはならない。」

おばあちゃんのこと、故郷に残してきた娘のこと、三カ月後に期限の切れるビザのことを考えるとソナさんの頭の中は混乱する。

だが、ソナさんはこの六カ月で、確かに何十万円かの現金を得た。仕事場に続くアパートの三帖間に住みいつしよに働く男たちの食事の面倒もみることで、生活費はそれほどかかっていない。東京の町を見たのは入管の手続きに行った時ぐらいである。このまま、ビザが切れても居すわるのか、一度帰って、また日本に来るのか。

五〇〇から六〇〇円で午後から深夜にかけての料理店の皿洗いや、カバンや靴の縫製の手伝い、スナックのウェイトレスなど。ビザも旅券も切れている人が多い。合法ぎりぎりののが、ソナさんのように訪問ビザの滞在期限ぎりぎりまでめいっばい稼いでいった帰国し、また来日するというやり方だ。しかし、日本政府は今年一月から、韓国での旅券取得が大幅に自由化されるのに伴って、入国ビザの条件を従来よりきびしくしたようだ。三カ月だった親族訪問のビザは一月に短縮され、延長は認めないという方針を打ち出した。今後、「出稼ぎ観光」は難しくなる

ことだろう。

ソナさんのような中年女性と違って、危うさをかかえているのは、「水商売」の女たちである。彼女たちには誘惑がつきものだから。分断の中での「出稼ぎ」女性の悲劇ともいえるのは、一九八二年以来、もう七年も光州の矯正所に捕われている李順姫（リ・スニ）さんの場合である。東京のコリアン・クラブのホステスだった彼女は、日本在住の北韓系同胞を通して韓国の現状を北へ伝えた」という罪状で十二年（八八年）残余の刑が減刑され九年に）の刑を宣告された。

コリアン・クラブには大体、二種類の客が出入りする。ひとつは韓国に旅行に行つて韓国通になった日本の男たち。もうひとつは、日本でいささかの成功を収め、経済的に余裕のできた在日韓国・朝鮮の男たちである。在日の男たちは、日本人の取引相手接待するためにもこうしたクラブを使うし、また時に故郷への郷愁をいやすために、こうした場所に入出入りする。皮肉なことだが、その中には朝鮮総連系の実業人たちもいる。ソウルと行ったり来たりする韓国系の人たちと違って南に故郷がありながら帰れない男、ことに日本人の妻と暮して日常生活の中で母国語を使う機会のない男たちは彼女た

ちの「ソウルことば」を聞くために何万円も使うことを惜しまない。故郷が同じ」と聞けば、町のあれこれ話をすようになるのも当然だろう。スニさんの知り合ったのも、このような男たちのひとりであり、彼に告げたことも、おそらくは誰でも知っている、公開された事実すぎなかつたろう。そもそも、出稼ぎにくる一介のホステスがどうして、国家の重大秘密を知りうるのだろうか。

彼女と同じ罪に問われた人たちの多くはインテリだった。若い学生のもとには、日本から支援のグループが面会にやってくる。しかし、彼女には日本人の知りあいほとんどいなかった。同じマンシヨンの人ときえつきあいはなかつたし、店の中では韓国人ばかりだったから。日本暮らしに続く、壁の中で、彼女の青春は過ぎ去ろうとしている。

今日も、入管の待合室や空港のロビーにはソナさんやスニさんのような女たちがあふれている。円とウォンの格差がある限り、この流れは止められないだろう。そして、不法入国という罪名も、国境があるからこそついたものにすぎないといえないだろう。



# 沖縄・基地の街に来る女性たち

高里 鈴代

沖縄では、毎日米軍の演習が目白押しに行われています。しかし、中央紙は沖縄の基地の状況を丁寧には載せていないので、本土ではこのことはあまり知られていないのではないのでしょうか。

フィリピンからの出稼ぎ女性の多くは演習が続いている米軍基地の周辺で働いています。従来の米軍基地への反対運動は、島を上から見て、どういった核弾頭や兵器があるかを論じてきました。一方、基地で働くフィリピン女性を知ることとは基地の状況を人間の目の高さで見ることです。これからは基地を上空からだけではなく、側面からも考える視点をぜひ入れていただきたいと思っています。

基地周辺のクラブ街は普段は静かです。円高で、兵隊たちは給料日に金を一日で使い果たしてしまい、残りの日は店を覗くだけか、一杯のドリンクで長時間ねばっているからです。

復帰後十六年たった今でも、沖縄

には三万五千人もの兵隊がいます。ベトナム戦争後、ドルが下がっていく中で、沖縄経済の基地への依存度は弱まりました。しかし、兵隊たちは依存としており続けているわけで彼らの受け皿としてフィリピンから女性が来るようになったのです。彼女たちは現在約四〇〇人以上いるといわれ、主としてハンセン基地周辺と嘉手納基地周辺で働いています。

一昨年フィリピンから女性歌手デッサ・ケサタさんが来沖したときもホステスをしている女性たちが彼女に、沖縄では兵隊はお金がなく、チップももらえない、むしろ兵隊たちのマスターベーションを手伝わされたりしていると訴え、デッサさんにショックを与えました。

十月のある晩、一軒のスナックの前を通りかかると、フィリピン人女性が私に心細げに一心に語りかけてきました。彼女はその日の晩、他の女性三人と那覇空港に着いたばかりでした。一緒だと思っていた三人は別々の店に送られ、着いたのは夜中なのに店に出るよう命じられました。客から踊るように注文されても、まさかヌードになって踊ることなどは彼女には知らなかったのです。

先日、リサ・ゴーさんと八三年に火事で二人のフィリピン人犠牲者を出して問題となったクラブへ行きました。七、八人の女性と話すうちに彼女たちはうちとけてきているんな話をし始めました。ステージでは一六歳の女性が踊っていました。だんだん服を脱がねばならぬのですが、彼女はビキニのヒモすら必死になつて落とすまいとして踊っていました。それを見ていた女性たちは、彼女はまだ十六歳だから何とかして守りたいのだが、無理だろうと言っている。その中の一人は「私の人生は家族や子供たちのためにあると思っ

今度は、その女性が踊る番になりました。実際にこやかに兵隊たちを相手にして、「好きでやっている」とみてもおかしくない踊りっぷりなのです。ところが彼女が、踊りながら突然タガログ語で叫び始めました。「私たちはこんなことをしたくない。仕方がないからしているのだ。この胸を振らなければ罰金になるから」部屋の角にはボックスがあり、沖縄の男性を相手に売春が強制されていました。ステージの側には大きなビデオがあり暴力シーンだけが流されています。それを兵隊たちがポーツと疲れた顔で見ている。そういうところで、女性たちは働いているのです。

沖縄市(もとのコザ市)は、昼間は観光客や地元の人々のショッピングセンターに、夜は基地の街にとカメレオンのように様子を变えます。

そこで働いている女性は必ずしも日本語を勉強する必要はなく、フィリピンとさして変わらない環境にみえますが、経済的な面では大変ひどい状況で、二五〇〜四五〇ドルという低い給料です。小さな部屋で自炊しながら働いていて、月一回の休みもほとんど遊びに行くことはできないし、遅刻して帰ってくる罰金をとられます。

フィリピンの女性たちが、今沖縄

に来て居るのは、本土に来て居る女性と同様、経済的な原因があります。が行き先によって、彼女たちが出合う問題も違ってくる。沖縄での問題は、基地と隣りあわせて彼女たちが生活しているということ。基地は暴力を肯定したもの、いつも危険をはらんでいる所であり、そこにいる男性たちは暴力を肯定する中で生きている。女というのは、暴力や金で支配していいという価値観が認められており、そういうところに彼女たちはいるのです。

かつて私は、大きな店のマネージャーに「彼女たちは、貧しくけなげで、家族を支えるために来たのだ。一方彼女たちがいるからこの街は安心して夜寝られるのだ。両方必要を満たしているのだから邪魔をするな」と怒鳴られました。基地のすさまじい暴力を彼女たちがクッションとなって薄めてくれる——このような感覚は、フィリピンの女性にばかりでなく、今まで沖縄の女性に求められてきたものなのです。

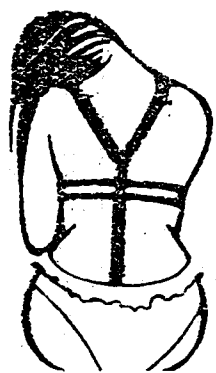
今、基地の街は、経済的メリットはふつとび、暴力的な力がますますエスカレートしています。今いる兵隊たちは、黒人・メキシカン・プエルトリコといったアメリカ社会で差別を受けたり、経済的に低いところにいる人たちです。アメリカ社会の

ひずみがそのまま沖縄に現われている、さらにそこにフィリピンの経済的・政治的構造のゆがみから押し出された女性たちが来る、という構造になっています。

このタダの女性の中には本土から来る観光の女性も含まれます。今、沖縄の状況は、フィリピン女性を包むように沖縄の年配の女性・中高生、本土から来る観光の女性があり、多様化しています。基地「男」といえるのが、男と女の関係とは何なのだろうか。もちろん売春を喜んでやって居る女性は一人もいない。男と女の関係が、性的関係が、暴力的に自分の全ての矛盾をはき出すもの、発散の対象となつて居るのです。そのはき出すものを受けなければ、きょうを生きていけない女性たちがいるのです。

アメリカでは軍の甘い勧誘で、弱冠十七、八歳の男性を入隊させています。彼らは、フィリピン女性や年配の女性にも満足せず、街で女の子と遊び、基地の中へ連れて行く。実は沖縄の県議会でも、ミッドウェイの寄港問題と同時に中高生の基地への出入りが問題になったこともありました。

女性が兵隊と遊ぶことに対して、それは一部のセックス好きの女性の話だと言ってしまうてよいのでしょうか。女性の性、からだ商品的に



扱われ、性そのものがものあるいは暴力ではかられるようになった今の日本の社会のなかで、女性たちもまたお金をもって、その価値感の中に流されていくのではないかと考えるのです。

日本女性は横田や横須賀で、黒人はセックスに強いイメージを持ち、「ねらつてやってくる」と週刊誌などでセンセーショナルに言われています。実は、それは、社会の中の、女性自身の中にもある黒人に対する差別の表われです。もう一方では、性に対するイメージを巨大大に作りあげている社会で、私たちの頭の中に性に対するものすごいイメージが作られてしまった結果ともいえます。

女性たちがセックス産業にこれほど多くかかわっている実態とは何だろうか、買われたり奪われたりという関係は何だろうか。昔は貧困の売春もあったが、今は



昔は買う側は一部の男性でした。けれども経済的に豊かになってくると、みんなが買えるようになってきた。だから、売らなければならぬ女性が多くなり、必要となってきたのです。買うことが全然問われぬままにきたことが、実は買える状況をますます拡大してきており、ますます貧しい女性を引き出す力となっています。フィリピンの女性たちが単に貧しいから来ているという捉え方ではなく、買う側の問題がきちんと問われていかねば「買わせる力」は国際化の中で嗜好を求めてもつと拡大していくでしょう。経済力、国際化、情報化、平均寿命の延びなどに支えられて、買う関係、売られる関係はますます拡大していく恐れがあります。出稼ぎ問題を考えるとき、売れる性売られる性、奪う性、奪われる性について、自身の問題として考えていくことが必要だと思っています。

## ピープルズ・プラン21世紀

# アジア女性フォーラム「アジア・フェミニズムの地平を開く」

アジアの民衆と共に次ぎの世紀を考へようという「ピープルズ・プラン21世紀」の国際民衆行事がこの夏日本列島を縦断した。その一環として八月十二日から三日間横浜で開かれた「アジア女性フォーラム」アジア・フェミニズムの地平を開く」にはアジアの女たちの会のメンバーも積極的に関わった。「出稼ぎ女性と人権」「女性・開発・援助」「からだ、環境、技術」「働く権利と労働運動」の四つの分科会のうち、「出稼ぎ」と「開発」の分科会は、会が取り組んで来たテーマなので、中心的に扱った。

アジア女性フォーラムの目的は、経済大国となった日本の女たちが、果してそのような経済開発が女性解放につながるものだったのか、ほかのアジアの国々の女たちにどのような苦痛をもたらしたのか、それに対してどのような闘いで抵抗したのか、日本の女もアジアの女と共に解放を勝ちとるアジア・フェミニズムをどう作るのか、などをアジアからの参加者とヒザ突き合わせて語り合うことであつた。そして、アジアの女性たちが直面している具体的な問題でこれからのように連帯活動を進めていくのかも話し合うことであつた。

アジア太平洋諸国を中心に二十カ国約四十人の女性たちを招いて、日

本全国から五百人近い女性たちが参加、まず分科会で、ついで全体会で、熱っぽい討論が行われた。たとえば、出稼ぎ分科会では、フィリピン女性が「日本の女性が出稼ぎとか売春とか性暴力とか個別の問題に取り組むだけで、なぜ、それを生み出して経済構造、帝国主義と正面から闘わないのか」と机をたたきながらきびしく追及すると、日本のフェミニスト側は、「個別の闘争を突き付けていくことで、体制をゆさぶるのがわれわれのやり方だ」と反論するなどの場面もあつた。

百数十人の参加者を受け入れた「女性・開発・援助」の分科会では、海外参加者たちが自国の女性の状況を生々しく報告した。第一に、経済的貧困で、多くの女たちは食べ物や飲み水、住まい、それに教育や保健といったBHN（人間が生きていくのに基本的に必要なもの）さえ得られない。第二に、レイプや家庭内暴力などの性暴力や売春やポルノなどの性の商品化、人口抑制政策の強制や生殖技術による女性の体への暴力など、性差別の被害を受けている。第三に、政治的抑圧や軍事化で女たちが投獄されたり殺されたりしている。第四に、公害や熱帯林伐採など環境破壊で女たちが生活を奪われ、生存を脅かされて

いる。

アジアの女たちが直面しているこのような問題は結局、これまでの先進国中心、第三世界の支配階級中心の利潤追求のための開発政策がもたらしたものであり、それには、アジアの女たちの責任も大きいことを各国の女性たちが指摘した。日本が企業進出や政府開発援助(ODA)によるダム建設など巨大開発をアジアの国々で進め、貧しい民衆、とくに、女性たちの暮らしが一層苦しくなっていることも報告された。

こうした現実を変えて女たちが人間として生きられる二一世紀に向けて、アジア・フェミニズムを創っていくことと、各国の女性たちがそれぞれの思いを全体会でぶつけた。それは、女性が男性に、第三世界が第一世界に、自然が人間(の技術・男性中心)によって支配されている構造と全面対決するよう女たちが力をつけ、力を分かち合おうという呼び掛けであつた。アジア・フェミニズムの内容の討論にまではゆきつかなかつたが、アジア・フェミニズムをそれぞれの国、それぞれの場で考え合うという共通の課題がフォーラムで投げ掛けられたのであつた。それは、とりわけ、日本の女たちに課せられたものであつた。

松井やより

## ●人権を守るために

# HELP支援活動の二年

●女性の家HELP・ディレクター

松田 瑞穂

アジア諸国からの出稼ぎ女性労働者が目立つようになつて十年以上になるが、アジア女性の緊急避難センター・HELPは三年前(一九八六年)の四月、日本キリスト教婦人矯風会の百周年記念事業として発足した。

日本に行けばホステスとして高額の給料を支払うというリクルーターに誘われて十八歳の時に来日したタイ女性、今年四月に逃げ出すまでの一年三ヶ月の間、スナックの二階で監禁され、売春を強要されていた。賃金も支払われずに一日三人から五人の客の相手を強要され、食事も満足にとることも出来ず、外部とは隔絶された劣悪な環境の中で働くことを強いられていた。妊娠二カ月で二人の子供が待つバンコクへ無一文で帰国して行った二十歳のタイ女性もいる。

賃金不払い、生活環境や労働条件の改善を雇主に要求したため暴力をふるわれ、大腿骨骨折、火傷を負われ命からがら逃げ出して来た二人のフィリピン女性たち。ようやく手

に入れた芸能人ビザで来日し、三日目に交通事故で幼い娘を残して死んだ二十二歳フィリピン女性。

日本人との結婚で、文化的背景や言葉の違いにより意志の疎通がうまくゆかず、相談相手もなく、嫁姑の問題、子供の認知、離婚、夫の暴力などについて一人で悩んだ末、電話で助けを求める女性たち。数回の来日で日本語も出来、友達が多いにもかかわらずさまざまな抑圧により薬に頼つた結果、精神障害で帰国後も入院を余儀なくされている二十八歳のフィリピン女性。

HELPではこのように、種々の状況におかれていた女性たちが三年間に七七〇人(十子ども二二六)が助けを求めて駆け込んでいた。そのうち外国人は四五五人(十乳幼児五人)であつた。外国人の国籍についてはさまざまであるが、フィリピンとタイ女性が圧倒的に多く、外国人女性の八三・四%がこの二カ国で占められている。

特に、八八年はタイ女性の急増が

目立ち、フィリピン女性と比較してさらに言葉の障害が多く、タイ語のボスターがHELPの食堂からトイレに至るまで張り出されたり、スタッフ、ボランティアのインスタントタイ語教室を開かざるを得ないといった事態が起こっている。

HELPは十五人の宿泊施設があり、緊急の場合、女性を年齢を問わず入所出来る。緊急避難センターの性格上、原則として滞在は二週間以内という制限があり、ここから仕事に通うことは出来ない。必要に応じてケースワーカーあるいは弁護士との相談が可能であり、医療機関を含め他の機関や団体へつなげる支援活動を行う。

しかし最近では自由を拘束されていたり監視がきびしく、自分の働いていたスナックやバーの店名やその住所さえ知らないケースが、時にタイ女性の間には増加している。従って賃金不払い、強制労働、暴力、監禁などで不当申し立てをしようにとしても、相手が特定出来ないなどの理

由で、助けようがない場合もふえている。

HELPに駆け込んで来る女性の大半は観光ビザで来日させられており、雇主の方はその弱味につけ込んで彼女たちを「見つければ不法滞在で強制退去になる」訴えても不法就労で国外追放になるだけ……と脅し、酷使する。入管法で単純労働者の受入れを認めていない体制が、外国人労働者を雇う側にとって有利に働く。二年間も賃金を一切支払わず酷使した女性を、体中アザだらけで追い出し、入管に通報して強制退去させるようなことが起こるのである。

HELPに来た女性達との関わりで見えて来るのは、彼女達を利用して儲けている人身売買組織の存在や日本社会の中に明らかに存在するアジア人蔑視、外国人差別の体質である。即ち構造化された、体質の中に組み込まれている問題である。支援グループの中にさえ女性出稼ぎ労働者の稼働状況はひどいものだから来なければいいという人がいる。従って仲介業者や雇主、客の男性側の言い分は、「嫌なら来なくていい」「代りはいくらでもいる」といった感覚で女性を輸入し暴力をむさばる。

人権を守り、保護する立場にある行政側も「不法に滞在し就労しているのだから……」「水商売で働いてい



る女性の権利？」といった感覚で、

すでに日本に入ってきた人びとの人権をどのように守るか、労働侵害が起こらないようにするか、労働権を守るかといった点は視野に入っていない。

それ以上に、日本社会全体が経済至上主義に走り、私たち自身に日本の「豊かさ」「繁栄」がアジアの民衆の犠牲の上に成り立っているという認識がほとんどない。私たち自身の「人間化」を追求していると思っていることが、実際はアジアの民衆の「非人間化」を引き起しているという自覚が薄いように思える。

日本など、先進諸国、多国籍企業の支配によって自国の政策・経済が左右され、出稼ぎ以外に生きる方策



のない人々が押し出される現実についてもっと認識する必要がある。

「なぜアジア諸国から人々が出稼ぎに来るのか」といった問いを単に日本側の都合で論議するとか、送り出し国の政策、事情に帰すだけでなく、政治・経済・社会全般にわたる構造的な不正義、不平等による出稼ぎ者を受け入れる国と送り出す国双方の問題としてとらえる必要がある。即ち「私たち日本人の生命、生活とアジア民衆の生命、生活」私たち自身の生命、生活の保持とアジア民衆の生命、生活の破壊の関係」というとらえ方である。

従ってアジア諸国からの出稼ぎ労働者の支援活動は、アジア諸国の民主化、人権、環境、公害、平和運動などと深くかかわっている。貧困の中で、正義を求め、人間として生きる権利を要求して闘っているアジアの民衆運動と密接な関係があるといえる。

具体的には、出稼ぎ者の受入れ国と送り出し国の間の緊密な連携により、安易に出稼ぎを再生産しないよう、日本の性風俗産業での稼働内容について十分な情報を交換したり、出来れば自分の国で仕事につけるよう教育や技能を身につける機会を女性に与え「食べられる」「仕事につける」方法を一緒に考えることも必要

である。

以上のように、H E L Pは大きく分けて三つの領域で活動している。一つは直接駆け込んで来る女性たちの支援であり、次に、その女性の支援で見て来る日本社会の矛盾、欺瞞、差別に対する意識化活動である。残りの一つは、出稼ぎ女性労働者を送り出しているアジア諸国の女性、市民グループとの連携、ネットワーク活動である。

第一の領域では、最近加療を必要とする出稼ぎ女性が多くなっている点に人権侵害の深刻さがうかがえる。それにもかかわらず再来日している女性も増え、「また来ている」との電話がかかる。逃げ出したくてもどこへどのように行かかわからない女性たちの必要としている情報をどのように知らせるか、正確な情報を広めて行くかが大切な点である。

第二の領域については、「性風俗産業」は相変わらず隆盛で、消費税の導入も余り影響していないようである。又増えつつける日本の中のアジア人労働者に対する日本側の政策は、相変わらず管理、排斥、締め出しの観点のみで処理され、「存在していない」ように扱われている。H E L Pでは、抗議活動の一環として「人権保障法」あるいは「平等法」、「差別禁止法」など具体的に今いる

人々、特に女性の人権を守るための法律の提言を顧問弁護士の協力で行ってゆきたいと考えている。又パスポートを取りあげている雇用主やプロダクションが多いが、これは明白な法律違反なので、この点にしばった具体的、現実的な法廷闘争を行いたいと計画している。

第三の領域については、少しずつ情報交換、連携活動（帰国した女性のフォローアップ）が軌道に乗って来ている。

今後の課題として、今年の夏からタイ人研修生を受け入れ、駆け込んで来た女性達と協力して出来るだけ早く効果的に支援や正しい情報を伝えられる体制を作りたいと計画している。又送り出し国の「出稼ぎ予備軍」に対する意識化プログラム（スライドあるいはマンガ、イラストによる資料作りはまだ始まったばかりである。）も必要である。

送り出し国の支援グループとの緊密な連絡により法律改正や誤った情報により出稼ぎ女性労働者達が不利益を受けないようなネットワークもようやく軌道に乗って来たといえる。今後ともH E L Pでは、女性の人権と自立を尊重した支援活動とアジアの民衆の側に立った隣人としての運動を続けて行きたいと考えている。

## ●人権を守るために

2

# 外国人労働者と法律

### 一 日本法の適用

日本政府は、いわゆる単純労働に従事する外国人労働者を受け入れないという政策を一貫して採っている。そのため、現在日本で就労している数多くの外国人労働者は、法的に言えば「不法」就労である。そして、「不法」就労をしている外国人は、入管法によって強制退去の対象となる。



マニラで海外出稼ぎ先を求めるフィリピン女性たち

しかし、「不法」就労であるから外国人が一切の日本法の保護を受けられないというのではないのである。

日本国憲法は、前文において国際協調主義を謳い、憲法一四条は、法の下での平等を規定し、判例も外国人の人権を原則として日本人と平等に認めている。また、被害者が外国人であっても、加害者である日本人に對して、刑法、労働者派遣事業法・職業安定法・売春防止法違反などの刑事罰が課される。そして非常に重要なことは、労働基準法三条が国籍を理由とする労働条件の差別を禁止していることに、はっきり見られるように労働法制において、外国人はたとえ「不法」就労であっても日本人と全く同等に扱われなければならないのである。

(一)賃金の不払いやピンハネなどについては、仮に「不法」就労であったとしても現実に労務を提供しているのだから、労働の対価として賃金の請求ができる。日本人が労働基準法に違反して深夜労働をしても、賃

金の請求ができるのと全く同じ理屈である。

ところで、雇主・ブローカーなどは、賃金の支払請求に対して、渡航費用、パスポート代、洋服代、食費などを支払っている、その分差し引いて払うと主張することが多い。しかし、これは、労働基準法二四条一項の賃金全額払いの原則に反し許されないものである。

また、ピンハネをしていたブローカーが労働者派遣法違反により有罪となった例もある。

(二)拘束や監禁などについて労働基準法一五条は、強制労働の禁止を規定している。また職業安定法上の保護規定としては、拘束による職業周旋の禁止、有害業務周旋の禁止（売春、ストリップなどをさせていた場合）、有料職業紹介、労働者供給事業の禁止などがある。ブローカーなどの行為はこれらの規定にあてはまるが、残念ながらこれらの法律が活用されているとはいえない。売買春の指図、強要に対して、売

●弁護士 福島瑞穂

### 二 権利救済の困難さ

しかし実際は、彼女たちは無権利状態におかれている。そして権利救済も困難である。

まず、彼女たちの多くは、日本の空港に着くと、ただちに車で店に連れていかれ、店の近くに住み、行き来も車という状態で、自分が一体どこにいるのかもわからないのが実情である。また、漢字の読めない彼女たち外国人にとって日本の地名や人名を記憶することは難しい。

以上のようなさまざまな制約の下で、彼女たちが店の名前、所在地などについて、明確な記憶を持ち、これらが確認されても障害はまだある。彼女たちは、「不法」就労者として強制退去処分を受けるため、入国管理局が手続きを行う一週間から一〇日間の間に法的救済の準備を進めなければならぬ。入国管理局が彼女たちが退去するのを待っていてくれることがある。しかし、捜査がすぐ進まない、事実調査が困難を極める、裁判に時間がかかるなどの事情の下



では、彼女たちには、何もせずに日本で手続きの進行を待つだけの余裕はない。働けないのだから帰るしかないのである。

告訴・告発がたとえ警察で受理されても、本人たちが帰国していることを理由に起訴されない場合がある。また、賃金不払いなどについて労働基準監督署へ告訴しようとしても、本人たちが帰国していることがわかると消極的になる。捜査や裁判のためだけに再来日してもらうことは、事実上不可能だ。たまたま警察などが店などに眼をつけ、内偵のうえ捜

査をした場合には、経営者が起訴され、有罪となることもある。しかし、本人たちの方から主体的に、権利救済を求めた場合は、以上のような障害があり、なかなか権利救済ができない。賃金支払いの請求などを交渉することはできるし、成功もしているが、裁判所・警察・労働基準監督署を利用することは困難である。そして、そのことが彼女たちの無権利状態を助長しているのである。

### 三 これから

しかし、問題も権利救済も始まっ

たばかりだ。

「証拠保全」という形で裁判所で彼女たちに証言してもらい、裁判官の面前で調書をつくり、それを後の裁判で活用したり、子どもの認知などのケースで、弁護士がフィリピンにいる、かつて日本に来ていた女性と会い、事情を聞き、帰国後、日本男性と交渉したりするなど、さまざまな試みや試行錯誤は行なわれている。

そして、制度に対する提言も不可欠であると考ええる。

3

## ●人権を守るために

# 台湾—女たちの闘い

台湾の首都台北の西部、古い町並に際立って高きつばなビルディング、それが私たちが招かれた会議の台北での会場となった艋舺教会であった。内にはエレベーターがあり、いつもの集会室があった。艋舺教会は台湾キリスト長老教会の一教会であるが、この教会の建物に、私は、台湾における長老教会のパワーを感じた。

一九八九年十一月十四日、福島瑞

穂さんと私は、HELIPの弁護士として、この台湾長老教会が主として山地の女性たちの売春問題について、具体的な活動のために設けたプロジェクト「彩虹婦女事工中心」(レインボー・プロジェクト)に招かれて台湾を訪れた。

うそのように思われるかもしれないが、私達は台湾に着いた夜、翌日から開かれる会議についてプロジェクトのメンバーである高李麗珍さん

### ●弁護士 大島 有紀子

と廖碧英さんと話し合うまでは、この会議の目的も、また、何故私達が会議に呼ばれたのかもわからなかった。

福島さんは、「アジア女性の日本における現況」というテーマで、私は「日本における出入国管理法と日本政府の政策」というテーマで話すようにとの依頼を受けていたにもかかわらず、いったいこれらの話しがとくに入管法や入管政策など、何の

クトのメンバーは、この問題を山地の経済問題に加え、物質欲のために娘に売春させてもよいという道徳や精神の問題であると説明する。五人の娘を売った金で建てたというりっぱな家のスライドを見せられ、複雑な気持ちになった。

どこの国でもそうであるが、業者とこれを取締る警察にゆ着があり、また仮りに警察によって保護されても、少女らはその親権者である親に引き渡され、業者が親のところから連れ帰るといったことで、何も解決しない。

このような状況の下、レインボーの人びとは、さまざまな活動を展開している。

すなわち、具体的に売春街へ行き、窓から山地の人びとに読める方法でパンフットや差入れ、プロジェクト

の左右を知らせ、逃げて出てくるように呼びかける。「私たちはあなた方を愛しています。」と。それはきわめて信仰的であると私は思った。

助け出された少女たちを彼女らに売った親からも保護する。

助け出された少女たちはもちろんのこと、山地の人びとに対し、教育を実践し、生活の手段としての訓練を施す。

少女らの保護救援の障害となっている制度等の改革を求める立法活動や、業者に対して政府が正しく取り締りをなすように行政を促す等のデモンストレーション。そしてさらに、ラディカルに、街にあふれるポルノを焼き払う等の行動が行われた。

そして、さらに今回の会議のよう

に、日本等に出稼ぎに行った山地の少女らに売春の強要が行われている事実を知って、これを予防するという新しい運動が加えられたのである。

このように、実にエネルギーが注

ぎ、火山にたとえるなら活火山の如きレインボーの闘いに私たちは、目をみはった。

最後に、何故、彼女らはかくもエネルギーギッシュなのか考えたところを披露してペンを置きたいと思う。

ひとつは、彼女らの運動が、その信託に根ざしたものであり、教会をバックにした宣教活動としての意味

をもっているということである。は

じめに書いたように、この国における長老教会のパワーとこの運動の展開とは深く結びついていると思う。

もうひとつは、台湾における売春問題の深刻さである。売春は、この時代でも深刻な人権問題であるわけであるが、卒直にいうと、それはかつて私たちの先輩が、日本において体験したのと同じような、すなわち現在の日本での状況に比べてはるかにシリアスなものである。

私が台湾の一週間のプログラムの中で、最も印象深く、最もショックングであったのは、三日目の夜メンバーたちと歩いた売春街であった。それは明るくて人通りの多いファシーストリートから一歩入った道幅はけいせい二メートルの路地であった。客とも用心棒とも見分けのつかない黒っぽいすよごれた男達がうろろする道にそって、間口一間か一間半程度の店に照明にてらされて少女たちは化粧をしてチャイナドレスを着て数人ずつ並んでいた(ああ、少女たちは私達をどのように見たのであろうか)。

さらに奥まった裏通りは、十段ほどの路地のような明りもなく倉庫が並んでいるようなところであった。しかし、そこにも戸口に数人の少女が箱の上に腰かけていた。戸口の奥

をのぞくと、箔の家の更衣室のようなドアが奥にむかつてずらりと並んでいた。まさかと思ってメンバーに尋ねると、それが売春の場所だといふのである。

どの店にもたいてい「一休四〇〇元」の張り紙があった。四〇〇元は約二〇〇〇円、日本の物価でいえば実質七〇〇〇円くらいだ。ところで「一休」とはどのくらいの時間かといえ、一五分であった(私はフイティミニッツと聞いたつもりでいたら、実はフイティーンミニッツだった)。

一五分間といい、更衣室といい、それはあるべき、人と人との交わりとはほど遠いものであった。

けれど、われらが日本においても、今、アジアから来た女性たちに対し、かつて行われていたような人身売買が行われている。経済力の面では変わったが、女性を自らの性の対象としてみる考え方は変わっていない。私達もまた闘いつづけないばならない。



台北の会議で日本政府の入管政策について報告する大島有紀子さん(左)



## ●人権を守るために

4

# 「人間を食べて」生きる

大島 静子

五月末フィリピンへ行った。夫婦でフラリと、出掛けたのだが、泊めてもらったバティスセンター(注)のボランティア、山田英津子さんや、そのほか友人たちの配慮によって、予想もしなかった実り多い旅になった。

ズシンと心にひびくことは、どれが一番と順序をつけることはできないが、ここではジュリーの中心を心に書くことにしよう。



マニラのバティスセンターを訪ねた大島静子さん(右端)

### —マニラでの再会—

門のくぐり戸を跨ぐと、いつも変らぬ愛情をもって、母犬と子犬三匹が歓迎してくれる。その奥のドアを押したところが応接間。このバティスセンターに、ジュリーと並んで腰掛けてみると、わたしは夢を見ていたような気分だ。彼女はいつしよに来た従兄弟を紹介して「彼は看護士なんですよ。わたしは日本から帰ってまっすぐ病院に入って、退院してから、伯母の家に世話になっているんです。つまり、このいとこのお母さん。彼女は早く夫に死なれて、五人の子供たちを苦労して育てた人なの。わたしの弟も妹もいっしょにいます。父と母はダバオにいますけど。わたしはいまデイスコの事務の方手伝っているの。夕方から行つて一晩六四ペソしかもらえないけど」と、そこで彼女は仕方がないわ、という風に微笑した。彼女は千葉県松戸で、友だち二人に置き去りにされて、デパートにいったけれど、あたりは暗く、いくあてもなく、ひとり

たたずんでいた時のことを、初めて自分の口で話したりもした。その前は、一年間茨城の海辺の店で働かされたのだが、そのことはわたしたちは触れなかった。

### 「わたしは人間が食べたい」

ジュリーが急に、狂ったようにあらゆるものを破壊し、だれもそばに近寄ることさえゆるさない冷たさ、怒り、そして孤独の恐怖を体中にみなぎらせて暴れたのは一昨年のクリスマスだった。精神病院に入院して四十日、H.E.L.P.のケースワーカーと、ボランティアたちが毎日のように彼女を見舞った。病院でも、最善を盡してくれていることが感じられた。ごうまん不遜に見える態度、ひとを寄せつけない頑固さがほんの少しづつ変っていった。快方に向うにつれて何度もH.E.L.P.に電話がかかる。ケースワーカーが不在のときは、他の者は応待に困るほどだった。たいてい何かのおねだりだ。「フィリピンの食べ物欲しいよう」「病院の

食事はいや。チョコレートとマンゴウが食べたい」など。あるときジュリーは叫んだ「人間が食べたいよう!」(I want to eat human beings) これを聞いた時わたし達はみんな笑った。笑いながらドキンとした。マニラでのジュリーは、完全に癒っていた。というより本来の彼女に戻っていた。彼女は、彼女が言った通り、人間を食べたのだ。

あんなに彼女をひどい目に遭わせて、使い捨てにした日本。日本人。もし、ジュリーが「日本人はイヤ」といつてわたしを拒否したとしても、わたしは一言もないだろう。なのに彼女は、わたしにもバティス・センターのスタッフにも親しみをもって語りかけ、その表情にはやさしさと信頼が溢れている。これは何の力によるのだろうか。

ジュリーには、ジュリーが「狂って」いようがいが、受け止めてくれる人がいた。伯母さんといこ達の愛情と包容力。そしてたしかに、地獄の日本ではあつたけれど、特に彼女が病気になる前から、いつも彼女のことを思い、そばに立ち、あるいは言葉をかけ、あらゆる手を盡くそうとした人びとがいた。わたしが知っている人びとばかりではないだろう。彼女に、どこかで通じるものがあったのだ。支えになったのだ。

彼女は健康な精神の持ち主であつたればこそ、日本で「狂った」のだ。ほんとに狂っているのはだれなのか。謙虚な人にさい疑心やねたみ心を起こさせ、穏やかな人に競争心をわき立たせ、頑固な人を強欲にひきずりこむもの。そうした社会を黙認するものは、惨めであるばかりでなく罪深い。ジュリーはあのととき、だれより孤独で惨めに見えたのだったが、フィリピンに帰ったジュリーは、相変らず貧しい。しかし、隣りに坐っている彼女は惨めではなく、それどころか他の人に働きかける力をもつ。

貧しさの限界を越えるときひとの判断にも狂いが生じ、「人間らしく」生きることは困難になる。ジュリーのいとも人間であることを求めれば、仕方なく二度目の出稼ぎにいかなければならぬのだらう。ジュリーだつてこのままの政情が続けばいつまた日本に行く日が来るかわからないのだ。

一日六四ペソでも、心の平和の方を選ぼうということかもしれない。  
【注】バティス・センター(Batis Center) バティスは「漂流」の意味。フィリピン出稼女性のための平和、公正希望を表わす。所在地はマニラ郊外のケンシ市。  
日本から帰国する女性の中には、精神的肉体的におケアを必要とする人がいます。センターは、連絡を受けて、空港の出迎え、家族との連絡、医療機関の紹介など、必要に応じてサービスを行います。また、誰でも宿泊できます。一泊一五〇ペソ(食事つき)。  
なおバティス・センターの活動は、八七年、H.E.L.P.から招かれたフィリピンキリスト教協議会の「家族、女性部担当者ミズ・マラシガンが、日本に行く女性たちの現状を知って、同志と共に始めたものです。開始期にあるバティス・センターを、日本からも応援して協力関係を築いていきたいと願っています。運営スタッフ：センター長、ソーシヤルワーカー、書記、会計、センター管理者、ボランティア。

## ●人権を守るために

5

# 移民女性への連帯—イギリス女性の取り組み

●弁護士 林 陽子

イギリスに一年半滞在した間に(八七年七月より八九年十二月)私が見聞した、イギリス女性たちの移民女性に対する連帯のための行動を紹介したい。

### ① 移民の福祉のための合同委員会

これは女性に限らず、移民全般に対する支援を行なっている、おそらくイギリスで最もパワフルな市民団

体である。空港や港における監視活動(不当な入国拒否を防ぐため)、必要な場合は弁護士を紹介するほか、出入国管理に関するさまざまなキャンペーンを外国人の立場から展開している。

ここで発行する年間レポートは、その水準の高さから政府も一置いている。もっとも、いささか「敷居」が高く、私は活動を見学させてほし

いと二回申し入れたが、拒否されてしまった。

財政面は、教会、労組、銀行が設立した財団、自治体からの助成金でまかなっている。

### ② 外国人労働者サービスユニット

主として移民の住宅、福利問題の相談窓口。サッチャーイズムの下で急速に数を増しつつあるホームレス

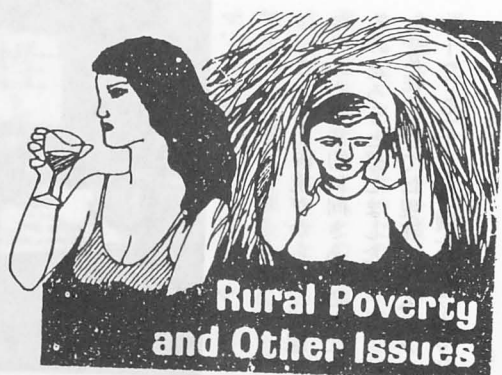
(家なき人々)のための活動を行なっている。

何人かの女性のスタッフが、それぞれ移民女性についてすぐれた報告書を出している。

### ③ アジア女性資料センター

イギリス国内にいるアジア女性(主なたーゲットは、インド、パキスタン、中国、フィリピン人など)に対する情報の伝達や、アジア文化を守りつづけるための手助けをしている。電話での法律、健康相談、さまざまな民族祭典の催しなど。強制送還の命令を受けたアジア女性の救援キャンペーンも展開しており、そのうちいくつかは成功を収めた。

ロンドンの閑静な住宅街の中にある、スタッフの女性たちは皆フレンド





ドリー(友好的)で楽しい人たちだった。

#### ④ シャクチ女性センター

イギリスにはウイメンズ・エイド・センターと呼ばれる、男性の暴力から逃れる女性のためのかけこみセンターが各地にある。但し最近、自治体からの助成金がカットされて閉館に追いこまれたところも多い。その

中のいくつかは第三世界出身の移民女性専用のものであり、スコットランドにあるこのセンターも、非白人女性のために設立された。このほかロンドンには、イラン女性、トルコ女性、パングラデシュ女性などの民族別の隠れ家がある。

日本にいるアジア女性と、イギリスにいる移民女性とで、どちらがよ

り多くの差別・偏見にさらされているかと聞かれれば、わからないとしか答えようがない。差別は形を変えてどの国にも存在するからだ。たとえば私は、「クレジットカードのご使用はイギリス人に限らせて頂きます」などという貼り紙をイギリスの街中で見つけるたびに、啞然としたものだ。『ブリティッシュ・オンリー』(外国人お断り)の札を

下げたバブもある。  
しかし、外国人を社会の中に抱えた現実を直視し、それに対応するための試みを着実にこなしている点で、イギリス社会は成熟していると思つた。私たち日本人も、政府の入管法対策とは別のレベルで、市民による外国人の人権保障活動を広げていくべき時だろう。

## ●人権を守るために

6

# タイ「女性の友」を訪ねて

大倉 弥生

五月(八九年)の連休にバンコクへ行き、私達の「タイ女性支援基金」の送り先である「女性の友」を訪ねてきましたので、報告します。

熱帯モンスーン気候のタイは四月が最も暑く、五月は乾季から雨季への変り目なのですが、私がバンコクで過ごした一週間は例年になく暑く、タイ人さえも「暑くてかなわない」と言っていました。

さて、到着した翌日はメーデーで、タイでは休日になっているのですが、「女性の友」は休日返上で動いているかもしれないと、事務所に電話をし

てみたところ、メンバーの女性が出てきました。ただ、日本への出張ぎ女性プロジェクト担当の弁護士の方、イヤーさんとコーディネーターのタナワディーさんは、二人ともカンチャナブリ(ビルマ国境の近く)に行っていて不在で、ようやく会えたのはその二日後でした。

「女性の友」が借りている四階建の小さなビルは、FAOのビルの筋向いの路地を入ったところにあります。入口には、タイ語と英語で「女性の友」と書かれた板が下げてあるだけです。

Jiapさん(タナワディーさんの愛称、タイでは愛称かファーストネームを呼ぶのが普通で、苗字はめつたに呼びません)とLeekさん(ナイヤーさんは、その日の朝カンチャナブリから帰ってきたばかりだったので、お昼過ぎの一時間程、私のために時間をとってくれました。

ところで、彼女たちがなぜカンチャナブリに行っていたかというと、今回のビルマの政変後の弾圧からタイに逃れてきた女子学生が、タイの警察官に強姦される事件があり、その救援に行つたのだそうです。ビル



「女性の友」の事務所で執務するメンバーの弁護士

ムで働いています。出稼ぎ女性の支援活動は、現在、偽造パスポートで出国し帰国後警察に留置されている二女性について、メンバーの男性弁護士が対応しているということでした。ただ、この活動は今年の一月に始まったばかりで、手口を次々に巧妙化させるエージェント、偽造と知っていて利用する女性、何も知らない女性、女性の本名を知るのにも

ひと苦勞するといった具合で、困難な問題をたくさん抱えているようでした。

Jiapさんがこうした話をしてくれているかわらで、Leekさんは事務所を訪れた女性の相談にのっています。そしてその間にも何本も電話が入り、Leekさんの手には電話連絡のメモが何枚も握られていました。パティック(更紗の巻きスカート)

を優雅に着こなした温かい眼ざしで迎えてくれたJiapさんと、相手を強い視線でみつめて猛烈な早口で話すLeekさん。せっかくの機会であったにもかかわらず、暑さと、中途半端な私のタイ語と英語のために十分なインタビューができず、今振り返ると、もっと質問することが一杯あったのと思います。

帰りぎわ、タクシーを拾おうと見

送ってくれたJiapさんが、私の手を握って大通りを一緒に渡ってくれました。タイへ行ったのは今度で四度目ですが、人と人との距離のとりかたが日本と違いハツとすることがよくあります。今回もLeekさんのそんな仕草に、日本にはないもの、心に残るものを感じてしまいました。「女性の友」と親しく手をつないでいきたいと思っています。

## 立ち寄りサポートセンター発足を目ざして、在日アジア女性と共に

高山 敦子  
柿木 和代

私たち「立ち寄りセンター運営委員会」は、今年(89年)一月七日に、アジアの女性たちの会の新しいプロジェクトとして、発足しました。それ以来の、私たちの主な活動について、報告します。

まず、私たちのグループは、月一回、スタッフミーティングを開き、活動方針、パーティーの運営、プロジェクトの企画等を行っています。

私たちは、活動の一端として、月一回、パーティーを催し、在日アジア女性との交流を深めております。現在までに、オープニング・パーティーを含めて毎月パーティー

ーを開きました。回を追う毎に、日本人、在日アジア女性双方の参加者も増えていきます。

私たちのプロジェクトとしては、日本の中(特に東京近辺)のエクスポージャー(探訪)や調査活動、電話によるインフォメーション・サービス、合宿を含む勉強会などさまざまな計画があります。

六月二五日に、フィリピン女性と共に「名古屋ラバーン事件」を考える集会を開きました。私たちの行っている月一回のティー・パーティーでは、毎回、講師を招いて講演や、スライド上映を行い、色々な問題について、多くの国の

女たちが論じて合っています。五月のパーティーで売春を強いられ、暴行、給料不払い、強姦等の被害を受けた四人のフィリピン女性が、経営者を相手取って裁判を起こしたラバーン事件について松井やよりさんから話を聞いたのをきっかけに、私たちも、日本で働く外国人女性労働者の人権を考え、彼女たちを支援する何かをしたいと、フィリピン・日本両国の女性が合同で集会を開くことになったのです。アジアの女性たちの会として在日アジア女性と初めての共同行動を起こしたわけです。(P4参照)

日本政府の安易で虚しい国際化

のかけ声とはうらはらに、日本国内では、外国人一特にアジア・第三世界地域から来た外国人は、弱い立場に置かれ、人権を侵害されています。私たちのグループは、人数も少なく、経験の浅い者ばかりですが、こういった、現状を考え、アジアの女性たちの人権を守るために、がんばってゆきたいと考えています。どうか、御協力をお願い致します。(渋谷コープ立ち寄りセンター運営委員会までお手紙でどうぞ)

定例会・毎月第三日曜午後二時から渋谷コープで行っています。



# 「解放」は地球の視野で

女性の国際人身売買に反対する会議

松井 やより

地球規模で広がっている女性の国際人身売買をストップしようという会議が八八年十月下旬ニューヨークで開かれた。「女性の性的奴隷制」(日本語版「性の植民地」)の著者、キヤスリン・バリーさん(ブランドイース大教授)ら、米国女性と呼ばれたもので、国際売買春問題に取り組んでいる西欧やアジアの女性たちも招かれ、私は日本の状況の報告を求められて参加した。ただ、個人の性的被害にこだわる米国女性と、第三世界の女性に対する性的搾取を追及するアジアや西欧の女性たちとすれ違う場面も多く、日本の女性として考えさせられた。

「フェミニズムの悪い影響として売春は女性の職業だ、という主張が出てきたが、売買春は人権侵害であり、女性差別の最たるもの、女奴隷制です。それは奴隷制廃止運動が奴隷を非難したのになかったように売春婦を非難することにはならない」——ニューヨーク市内のマーチン・ルーサー・キング中学講堂に集まった約三百人の参加者に、まずユネスコ人権平和部のワシラ・タムザリさん字

ユニシア女性)が、米国などで唱えられる「売春の自由」講に明快に反論し「売買春、近親相姦(かん)、ポルノなど性のあり方として最も忌むべきものと闘おう」と口火を切った。

第三世界の女性たちの発言には怒りがこめられていた。フィリピンの出稼ぎ女性問題と取り組む「カラヤン」のオーロラ・デ・ディオスさんは「オロンガポなど米軍基地の町では一万五千人もの女性が貧困ゆえに米兵に性を売り、性病、麻薬、中絶などで健康も害われている」と基地撤去を訴えた。韓国の女性解放グループの李明カさんも「買春観光もひどいが、四万六千人の米軍駐留下、基地売春でエイズが持ち込まれたり、売春婦が犠牲になっている」と米国を非難した。

さらに、アフリカ・ジンバブエの社会学者ルド・ガイザヌワさんは「独立前から売買春はあったが、南アフリカやモザンビークの政治状況のためにもっと多くの黒人女性が売春に追いやられている。最近では欧米から白人男性観光客が黒人女性を買いに来る」と買春観光を批判し、「女性解放運動は売買春問題を避けてはな

らない」と強調した。

## 「国際ネットワーク」を提唱

一方、西欧からは、タイにセックスツアーに出かける男性たちをオスロの空港へデモをかけて阻止したノルウェーの「女性フロント」、アジアからの出稼ぎ女性たちを支援しているスイスの「第三世界女性情報センター」や、オランダの「女性人身売買反対基金」のメンバーがそれぞれの活動について語り、国内だけで売買春を問題にしても男性たちが代わりばんこくマニラへというのでは解決にならない。地球の視野が必要だ(ノルウェーのトゥリネ・トエンさん)と、西欧グループは第三世界女性との共闘を重視した。

ところが、地元米国女性の関心はもっぱら国内、それも個人の性的被害に集中した。ポルノなどの分科会に参加者があふれ、近親相姦やレイプや売春などの体験者証言は、とくに反響があった。この会議を企画した中心グループが、ポルノ反対のフェミニストたちだったこともある。日本からもポルノ問題に取り組んでいる船橋邦子さん(アジアの女たち



ニューヨークで開かれた女性売買に反対する国際会議の参加者たちは国連広場で小さなデモをした。(1988年10月)

の会)や三井マリ子都議が日本のポルノ状況と反対運動を報告した。

ただ、ポルノやレイプなどと、国際売買春のつながりに目を向けようとしない米国女性の態度には、米国女性の中から自己批判の声が上がった。東京のアジア出稼ぎ女性の家「HELPE」のスタッフだったキャロライン・フランシスさんや、タイ、フィリピン、韓国で活動していたクエーカー派のルース・カドワレイダーさんらが「アジアの女性たちの声に反応しない方がいいのか」と問いかけた。

当のフィリピンや韓国の女性たちは憤慨し、東京のフィリピン問題資料センター(RCPC)出稼ぎ女性コーディネーターのリザ・ゴーさんは「第一世界(先進国)と第三世界の女性の団結」という題のスピーチで、七、八万人にもふえた来日フィリピン女性の人権侵害や花嫁問題を述べたあと「米国女性はなぜ沈黙するのか、個人のセックス問題だけ考えて

いた方が安全だからか。人種差別をさへ感じる。基地や観光地で、出稼ぎ先で、何万、何十万の女性たちが商品として売買されるのをこれ以上許せない」と結んだ。

# アジアからの出稼ぎ女性問題を知る本

内海 愛子

アジア人出稼ぎ労働者の受け入れをめぐる、論議がさかんである。

しかし、この論議は、男性の労働者の受け入れが日本の労働市場に与える影響が問題の中心にすえられている。アジアからの男性出稼ぎ労働者が目立って増えはじめたのは、一九八〇年代の後半に入ってからである。それまでも女性の出稼ぎ労働者もいたはずである。しかし、女たちが、風俗営業で働いているかぎりではこうした論議もまき起こらなかった。売春強制を含むアジア女性の性風俗産業での労働は「特殊な問題」として見なされてきたようだ。時折、新聞やテレビに登場する彼女たちが、いかに人権をふみにじられているのか、大島静子「HELP」(朝日新聞社刊)を読むとよくわかる。無権利状態のなかで使い捨てられ、心身共にボロボロになってHELPにかけこむアジアの女たち、彼女たちのかかえる難しい問題の解決にかけまわ

これを受けて、ペルーで街頭の売春婦の救援をしているローザ・トラパソさんが「国際的共同行動を起こすためのネットワークをつくらう」と提案。会議主催者の米国女性と西

欧、第三世界の女性たちが会合を重ね、リザ・ゴーさんが連絡役を引き受けた(朝日新聞八八年十一月二十一日朝刊)

の問題に対しての全体的な見取図が描けるように工夫をされている。

似たようなタイトルの『ジャパゆきさん物語』(別冊宝島JICC出版)は、ドキュメンタリー、手記を中心に編集されている。写真の使い方やレイアウトなどから、興味本位のきわもののように見えるが、各々のドキュメントなどは真面目な問題へのとりくみをしたものもある。

水町亮介の『犯されたアジアータイのじやばゆきさん物語』(ブレンセンター)もおどろおどろしいタイトルである。だが、筆者の姿勢は、『じやばゆきさん』を通して次第にタイにのめりこんでいき、なぜ、彼女たちが出稼ぎにこななければならぬのか、何度もタイに足を運びながら考えていく。一人の力ではどうすることも出来ない、日本とタイを結ぶ構造的暴力の前に立ちつくす筆者問題はここからスタートするのでは

ないのか。

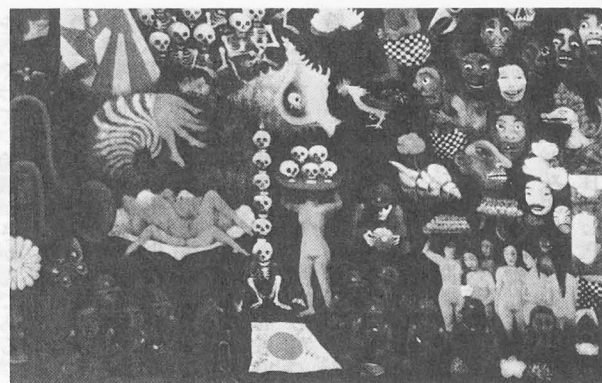
「貧しいアジア」「かわいそうなアジア」の人々を助けてあげる、これも必要なことではある。だが、アジアを貧しくしている構造に手をつけることがない限り、事態はかわらない。アジアは助けてあげる対象ではなく、同時代を共に生きる人間として、私たちに必要なのはアジアの人たちと共に怒ることの出来る感性と論理ではないのか、しかし、豊かで何となく楽な今の暮らしのなかで、それを支える構造にまで、手をつけようとうみ出す人たちは少ない。自分の暮しに影響のないかぎりでは貧しいアジアの人びとを「救済」しようとした人たちはこれからも多く出るだろう。構造的暴力に対して、私たちが何をすべきか、豊かになったからこそ、貧しい「私たちの暮しのありようを問い直してみることが、助けることと同時になければならないと思う。その意味でもスリランカ花嫁さんの救援にも動きまわっている中村尚司の『豊かなアジア貧しい日本』(学陽書房)は、アジアからの出稼ぎ女性の問題を考える上で、読んでおきたい本である。毎日新聞社の『じばんぐ』や石山永一郎『フィリピン出稼ぎ労働者』も出ている。



# 『海の記憶』上映会から

## 朝鮮人従軍慰安婦に捧げる献花

富山妙子さんに聞く――



男は強制連行、女は従軍慰安婦にされたことを日本の戦争責任として、これを描こうと思いました。

――多くの日本人は従軍慰安婦のことが知らない。私も高校を出る頃初めて聞きました。

富山 戦争中、日本軍が中国や東南アジアの各地を侵略し、何をしたか。侵略された側の国では学校の教科書で教え、その生き残りの人もいるわけだし、みんな過去のことを知っている。それに対して日本人は、教科書でも教えないし、過去の侵略の事実を知らされていない、無知だから韓国や東南アジアに、平気で買春観光に行けるんじゃないか。昔と今が重なってくるんです。

現在の買春ツアー、あるいは日本に出稼ぎに来て性産業で働くアジアの女性たち、殺されたり、死んだりしても声もあげない女性たちが今もいますからね。

――ところで、戦場に行った慰安婦たちは、その後どうなったのでしょうか。

富山 そうね、彼女たちは今生きていたら、六〇代か七〇代でしょう。

その人たちは故郷へ帰っていない。

なぜかという、朝鮮は儒教道徳の国で、女の貞潔が尊ばれる。男は妓生を買ったり妾を持っても「男の甲斐性」とみなされるのに、戦争で慰安婦にされた女は村の噂になり「汚れた女」として、罪人のように過去をかくして生きなければならぬ。

日本軍からも同胞からも、二重に差別を受けることになった。そのため自殺した人もいます。いま生きていたとしたら、その人たちの老後問題がある。せめてやすらかな老後の保障をするべきでしょう。この事実も日韓両政府が「ふれたくない」ものとして、消しています。

私は誘い水のようなもので、元慰安婦だった人たちに、声をあげ、語ってもらいたい。残り少ない人生のために、あなた方の深い悲しみ「恨」の声を、という思いからです。

――ヨーロッパで個展を開かれ、スライドも上映されたそうですが、向こうの人たちの反応はいかがでしたか。

富山 一九八八年の十月、個展とスライド上映をロンドン大学内で開きました。ちょうど天皇の重体さわぎの中だったので、話題を集めました。どうして日本の男たちが慰安婦を連れて戦場に行くのか、その発想はどこからきたのかと、聞かれる

わけね。私自身も、どうしてこんなことになったのかなあと考えた。じゃあヨーロッパの場合はどうなのか聞くと、ヨーロッパの場合は、交代で家に帰す、または売春婦のいるところへ兵隊が出かけてゆく、軍隊が売春を管理するなどというところはな

いわけです。

――では、日本が特殊なのですか。

富山 どうしてなのか私なりに考えて、どうもこれは日本文化の問題になってくる。たとえば封建社会下がなじがらめの身分制の中で息ぬきの場として支配者は「廓」を作った。やはり「ゲイシャとサムライ」は日本文化のシンボルなのです。

戦争になれば「軍隊と慰安婦」、戦後には「企業戦士と性産業」。性はつねにコントロールの装置として使われてきたのではないかと思います。

男が女の膝枕で「天下国家を憂う」のは幕末の志士から社会主義者まで。総理大臣がゲイシャの三本指を握って交渉。しかし女を買ったことと大臣を下ろされた。これも新しい時代が来たことですね。

（インタビュー 太田直子）

# ひるば

拝啓 こちらは、毎日暑い日が相変わらず続いております。先日、ある友人宅で「教科書に書かれなかった戦争」(アジアの女たちの会編)の本を目にしました。

私はこのように、本当のことが書かれた本、大いに歓迎したいと思っています。日本には二つの流れがあると思います。一つは戦争を風化させようとする動き(これはもうあまりにも無意識になされていてそれを動きと感じてない人が多数では?)そしてもう一つ、戦争を伝えようとする動き……。

私は現在無職の二十二才の者です。先日、松井やよりさんの『女たちのアジア』、そして『魂にふれるアジア』を読んで大変ショックを受けました。日本など先進国と、アジアの間にこのような複雑な問題が(経済問題、売春問題など)横たわっていることに全くといっていいほど無関心であった自分を大変恥ずかしく思いました。これからはアジアのこと、女性のことについて、もっと考えて行きたいと思っています。(福岡 橋谷恵美)

福岡でもかけ込みセンター的なものを、と、この秋から準備しようとしています。一〇月二五日―一カ月、リサ・ゴーさんが九州入りしてくれ、それが、大きな力となると思います。この夏は、忙しかったけど、たいへん充実しました。ありがたう。また元気で会いたく思います。(松崎百合子)

創立当時から会にかかわって、もう十一年が過ぎようとしております。多くの機関誌づくりにかわり、今号でこのかたちの機関誌は終了します。ふりかえってみれば「買春観光反対」を出発点に、色々なアジアの問題にアプローチしてきました。これから新しい形態で問題提起をしてゆくことと思います。長い間、ほんとうにありがたうございました。(須田幸子)

## 活動報告

88年5月～89年8月

- 88年
- 5・20 「光州八周年記念集会」
  - 5・25 女大学 連続講座 第1回「アジアからの出稼ぎ女性と私たち」 松井やより
  - 6・8 女大学 第2回 松田瑞穂
  - 6・21 女大学 第3回 リサ・ゴー
  - 7・6 女大学 第4回 高里鈴代
  - 7・21 女大学 第5回 福島瑞穂
  - 11・13 天皇の戦争責任を考える集会
  - 12・7 天皇の戦争責任について在ベルリン・アジアの女たちの会
- 89年
- 4・1 タイ出稼ぎ女性の人権を守る集会 松田瑞穂、スリチャイ・ワンゲーオ
  - 4・12 「海の記憶」初上映会 富山妙子、高橋悠治
  - 5・25 「光州九周年記念集会」 鄭敬謨
  - 6・25 フィリピン・日本女性合同集会 ―ラバーン事件を考える― 野上幸恵ほか
  - 8・1 女たちは6・4を忘れない「花なきバラ」天安門事件を考える 田畑佐和子他
  - 8・12～15 PP21 アジア女性フォーラムに参加
  - 8・16 アジア出稼ぎ女性の人権を守る集会 ナイヤナーほか

# 海の記憶

## 戦争を知らない人たちに

スライド・セット カラー100コマ、カセット・テープ付  
上映時間 25分 販売3万円 貸出し料1万円 送料別途  
郵便振替 東京7-37311 火種の会  
●英語版・韓国語版・フランス語版・ドイツ語版・スペイン語版もあります。  
★学校やグループで上映して下さい。

AN AUDIO-VISUAL WORK

火種工房

東京都世田谷区桜丘4-16-2 〒156  
Tel: 03・425・6095

## 制作スタッフ

絵・詞	富山	山橋	妙悠	子治
音楽	高橋	井橋	悠成	純一
語り	新本	橋本	成純	弘房
撮影	加火	藤種	純工	
照明				
製作				



## あなたも会員になりませんか？

女にとってアジアは一見遠い世界のように見えますが、実はとても身近なのです。フィリピンのバナナ、インドネシアのエビ、スリランカの紅茶などが私たちの暮らしの中に入り、アジアからの出稼ぎの人々や留学生たちや花嫁さんなども増えています。

一方、日本の男性たちがアジアの女たちを買いに出かけたり、日本の企業が進出してアジアの女性たちを安く使っています。

そんな日本の社会を変え、私たちの生き方を問い直すためにも、会に参加して、共に学び、行動し、アジアの女たちとのつながりを作りませんか。

専従もいない会です。ボランティアとして会を支えて下さる方を歓迎します。

### 活動内容

- 出稼ぎ女性支援** 英文「海を渡る女たち」、「ミニインフォ」日本での生活(英語、タイ語、タガログ語)などの発行  
立ち寄りサポートセンター・タイ女性支援基金・オロンガボの女たちの会協力
- 開発と女性** 政府開発援助(ODA)の女性への影響調査
- 暮らしの中のアジア** 消費生活のつながりを考える  
日系企業進出の問題
- 戦争責任** 日本軍のアジアへの侵略調査
- 人権問題** 在日アジア人、アジアの政治犯救援など
- 機関誌発行** 「アジアと女性解放」  
16号「アジアの女と人口政策」  
17号「アジアの女たちの詩」  
18号「開発と女性」  
19号「暮らしの中のアジアII」 各号400円
- ニュースレター発行** 「アジア・女・通信」随時会員配布
- 入会方法** 年会費(3500円)を郵便振替東京0-46143アジアの女たちの会宛に「入会申し込み」と明記して送付して下さい。(現金書留不可)

## アジア出稼ぎ女性支援のために活用を！

### スライド / 裏 / 切 / ら / れ / た / 夢 /

— アジアからの出稼ぎ女性 —

製作：アジアの女たちの会 貸出し料：5,000円(送料別)  
販売：スライド・テープ付 上映時間：21分  
20,000円(日本語版・英語版) 連絡先：遠野 ☎045-592-4950

### 英文ブックレット

「海を渡る女たち」 定価 ¥800  
Women From Across The Seas  
— Migrant Workers In Japan —

日本に出稼ぎに来ている女性たちに配布して下さい。



**MINI INFO** 10部 ¥300

(英語・タガログ語・タイ語)

お問い合わせは

**アジアの女たちの会**

〒150 東京都渋谷区桜丘14-10 渋谷コープ211 Tel/Fax 03-463-9752

## ☆☆会からのお知らせ☆☆

### 新運営委員会発足

#### 90年代の会の方向を検討します。

アジアの女たちの会は、専従なしのボランティアの運動体で、タイ女性支援基金とか、立ち寄りサポートセンターとか、新しいプロジェクトを通じて入会する方もふえ、約600人の会員がいますが、グループごとの活動に追われたり、会全体の事務作業を分担する会員が少ないのが実情です。このため、各方面にご迷惑をおかけしておりましたが、6月から新しい運営委員会(メンバー7人、代表世話人内海愛子さん)が発足し、会計や名簿整理、郵便物処理など会の事務を中村美佐保さんをお願いすることになりました。しかし、会の活動をさらに充実させるためにはボランティアとして協力して下さる方を必要としています。

新運営委員会は90年代の会の活動の方向について年末まで討論を重ねたいと思います。毎月第2土曜日午後6時から渋谷コープで運営委員会を開きますので、電話かFAX(463-9752)でご意見、提案などお寄せ下さい。

### 編集後記

●足かけ三年? こんなに長く編集担当に居るわった人、いなかっただけでは? ただただけ刊行がくれた結果です。まず会員の皆さまにお詫び申し上げます。

●当初「10周年記念号」として企画がスタートしたのが、88年上旬のことだったか、87年末のことだったか、●それぞれの活動を展開しながら、同時に10年間の活動をまとめるといふのは、各分科会にとっても容易なことではなかったようです。まず時間的に。それから章に立てたテーマが10年間のそれぞれの時期で重なり合ったり離れたり、必ずしもストレートに今の分科会に結びついていないこと、また活動を担う顔ぶれにも出入りがあったこととも関係あったでしょう。

●ともあれ、せっかく原稿をお寄せいただいた方々、申し訳ありませんでした。また別の機会にご紹介したいと思っています。

●さて、今号をもってこれまでのような形での機関誌はひと区切りといたします。バック・ナンバーの在庫はまだまだありますので(二部売切れ)ぜひまわりの人にすすめて下さい。今後の機関誌編集・刊行のやり方については、目下検討中です。ご意見をお待ちしています。(梅原)

### 松井やより アジア・女・民衆 アジアが見えてくる1

アジア・女・民衆の現在を、闘いを、そして日本との関係を、3年半の特派員経験をもとに熟っぽく語る行動提起の書。 ★1200円

### 鶴見良行 エビ・ナマコはどこから アジアが見えてくる2

バナナ・自動車・エビ・ナマコ。商品を通じてアジアと日本の関係をとらえかえし、新たなアジアの見方、歩き方を示す。 ★1000円

**新 幹 社** 東京都千代田区神田神保町3-13 東大ビル  
☎03-221-9947 発売◎草風館 ☎239-1860

